

イザベラ・バードの描いた碓ヶ関と子どもと遊び

What Isabella Bird Saw, during Her Travel through the Northern Part of Japan, in the Province of Ikarigaseki and what Children Played there

高 畑 美代子^{*,**}・齋 藤 捷 一^{*}

Miyoko TAKAHATA^{*,**} and Shôichi SAITO^{*}

キーワード：イザベラ・バード、碓ヶ関、明治初期の学校、子どもの遊び、甲虫、凧、カルタ、ウィリアムE.グリフィス

Key Words : Isabella L. Bird, Ikarigaseki, school, children's games, beetle, kite, Alphabet cards, William E. Griffs

要旨：

明治11年（1878）に英国の女性旅行家イザベラ・バードは北日本を「蝦夷」へ向かって旅をしていた。蝦夷への汽船の出る青森港を目前にして、彼女は県境の碓ヶ関村で大雨に足止めされ4日間を過ごした。彼女はそこで眼にした大雨の矢立峠や洪水に見舞われた村人の様子を書いている。水が引くのを待つ間に彼女は、休暇中の子どもたちが甲虫、水車、凧、カルタをして遊ぶ姿を描いた。同時に彼らは休暇後の試験に向けてまじめに勉強する子ども達でもあった。碓ヶ関での現地調査と文献を基に、彼女の記述を辿り、青森県の学校事情を踏まえて明治の子どもを取り巻く環境と津軽の地域子ども文化の復原を試みた。

また、翻訳された『日本奥地紀行』は初版の2巻本に基づくものではなく、碓ヶ関ではカルタ遊びの部分が未訳となっているので翻訳紹介をした。これらはいずれも、研究者により1巻本の省略の要因のひとつとされてきたブラキストンの指摘にかかわる部分を含んでいる。ブラキストンが『蝦夷地の中の日本』において、バードの記述の問題点として指摘した中に、グリフィスの名前がある。彼の『明治日本体験記』の中には、バードの記述との類似が見られる。そこでグリフィスとバードの記述の比較をした。

子どもの遊びを検証する一方で、彼女の滞在した碓ヶ関の宿屋・店屋や登場する人々の特定をした。その葛原旅館は現存しないもののバードが来たことを伝聞された曾孫から話を聞くことが出来た。また戸長と宿の亭主が兄弟であったことや彼女と話を交わしたと思われる人々が揺籃期の明治の教育制度の中で重要な位置を占めていたことなど彼女の記述の裏づけとなる背景がわかった。また橋や災害の記述の正確さを示す史料も見つけることができた。

しかし子どもの遊びに関しては、特に津軽では史料の多い凧の記述などからバードは見たままを描いたのではなく、碓ヶ関という場で彼女がとても好きだという「バードの日本の子ども観」を展開したという結論に達せざるを得なかった。

* 弘前大学大学院地域社会研究科（後期博士課程）地域文化研究講座
Regional Cultural Studies, Regional Studies (Doctoral Course), Graduate School of Hirosaki University

** あおもりくらしの総合研究所
Institute of Aomori livelihood

Summary :

Isabella L. Bird was an English lady who was one of the lady travelers. She traveled for Ezo (Hokkaido) by herself throughout the northern part of Japan in Meiji 11 (1878).

She took with her only Mr. Ito who was her servant interpreter. When she came to Ikarigaseki, Aomori, she was there storm-stayed for four days. She portrayed what she saw and what children played there. We examined how people had lived on and children had been playing in the district of Ikarigaseki where it was a part of Tsugaru that had kept a particular culture at the time of 1878.

Isabella Bird described that the children there were flying *tako* (kite), playing with eight beetles harnessed in paper carts drawing a load of rice up an inclined plane, set toy water-wheels and playing the game of *karuta* (Alphabet cards). Though we tried to look out for traces of all these things there, these were not borne out by fact.

On the other side, we found the traces of the *yadoya* (hotel) where she stayed and names of the house master and *Kocho* (the head of the district). And what she wrote about rains, length of the roads and the bridges and population were found out to be very accurately attested by historical documents.

So we hold the view that she tried to tell about the culture of Japanese children and behavior of them. In addition, she discussed about Japanese educational system which had just been constructed relating with some persons of importance in the village. She showed us her views on the subjects of bringing up children, their sanitation and their living condition, which Japanese people have hardly noticed, that we can start thinking what and how we have been when we look upon our past on the wake of the observations of the past great lady traveler.

I. はじめに

英国人の女性旅行家であるイザベラ・ルーシー・バード (Isabella Lucy Bird) は、明治維新からおよそ10年後の東北を通訳の伊藤を連れ馬にまたがりひとり旅をした。維新から10年の歳月が流れているものの、当時の東北の人々の生活はまだ前時代の残像を強く残していた。衣食住や風習には江戸時代と大きな変化はなかったが、一方では、明治新政府の施策が着々と進められていた。学制がしかれ、教育制度が整いつつあり、郵便・警察・医療等の諸制度が新たに構築されつつあった。日本のシステムはまさに大転換の真っ只中だった。彼女はそのような東北の農村で、変わらない日本と変わりゆく日本とを垣間見た。その紀行文が1880年に“*Unbeaten Tracks in Japan*”として英国で出版された(省略本の邦訳『日本奥地紀行』¹⁾)。その礎ヶ関部分は青森県と秋田県の県境である矢立峠を越えるところから始まる。

江戸時代の後半から明治のはじめにかけて、羽州街道伝いにこの峠を越えて、関所があった礎ヶ関²を通り抜けた人々がいた。ここに逗留する者もあった。江戸時代には『菅江真澄遊覧記』³を残した菅江真澄や巡見使に随行して東北地方を視察した古川古松軒⁴がいた。日本地図を完成させた伊能忠敬⁵もこの峠を越えた。

明治11年には英国人のイザベラ・バードが、矢立峠を越え、女性としてはじめてこの地域の記録を残した。彼女の記述には、菅江真澄や古川古松軒とは異なる二つの視点がある。第一は、英国人であるという異文化からのまなざしである。風景や村落のたたずまい、風俗や風習などを詳細に書いている。異なった文化基盤からの視線で、日本人には気づかない様々な問題点や美しさ、注目すべき日々の生活を描き出す。特に子どもの教育については、英国や米国と比較して「日本のやりかたがいちばんいい」とまで言っている。第二は女性の視点である。人々の髪型から着衣、衛生状態、

食べ物、店、乳児・幼児の状態、子どもたちの遊びに至るまで、その観察は細かい。赤ちゃんを背負った幼い子どもたちの姿や、母親の様子など女性ならではの眼がそこそこに見られる。ここではイザベラ・バードの子どもや教育に向けられた視線を通して偶然にも大雨のため4日間を過ごすこととなった青森県碓ヶ関の明治11年（1878）の姿を探り出していく。

Ⅱ. イザベラ・バード

イザベラ・バードは、1831年、英国のバラブリッジで牧師の長女として生まれた。世界（アメリカ・カナダ、サンドイッチ（ハワイ）諸島・ロッキー山脈、日本・マレー半島、インド・西チベット・ペルシャ、中国、朝鮮、モロッコ）を旅したその軌跡はいずれも旅行記として出版された⁶。その生涯と半世紀にわたる旅はアンナ・ストッダート⁷、パット・バー⁸、オリーブ・チェックランド⁹の伝記により明らかにされてきた。一方、金坂清則氏¹⁰の英国での丹念な調査により今まで知られていなかった110もの文献が拾い上げられた。さらに氏は彼女の生涯を6期に分け、旅程、執筆活動・旅行記等を整理し、多面的な彼女の活動を紹介した。また、今まで謎とされてきた通訳のイトウ（伊藤鶴吉）の姿を明らかにした。高梨健吉氏の訳による『日本奥地紀行』は多くの人に読まれてきたが、その一方、これが2巻本の初版によるものではなく大幅に削除された1巻本のTuttle版によるものであった。このことに対しては、高梨氏をはじめ、武藤信義¹¹、長谷川誠一¹²、楠家重敏¹³等の諸氏が彼女の日本における活動の全容を知るには不十分であるとしている。武藤氏は栃木-新潟までの削除部分を翻訳して紹介した。さらに、楠家氏の『バード 日本紀行』の出版により、1巻本で削除された「伊勢神宮訪問」¹⁴の章、序章、終章が邦訳で紹介された。両氏により、初版本（2巻本）の*Unbeaten Tracks in Japan*の全容が示された。しかし各章内には、部分的に削除された箇所が残っておりまだ完全とはいえない。本稿ではその一部を取り上げる。

また1巻本の削除部分はブラキストンの批判への対応でもあったことが長谷川、武藤、金坂、楠家氏等により論じられてきた。また、楠家氏はケプロン¹⁵も北海道部分への異議を唱えたことを示すと同時に初版刊行直前にもバードが普及版の出版を考えていたことを示した¹⁶。さらに、ブラキストン¹⁷の指摘した「グリフィス¹⁸等からの盗品」というバードへの厳しい批判は本稿の主眼である碓ヶ関の子どもたちの遊びの部分にも関係してくる。

一方、彼女の活動はレディ・トラベラー¹⁹、フェミニスト、宗教活動²⁰などの視点から考えてみる必要があるとされている。O・チェックランドはバードが王立地理学協会、王立スコットランド地理学協会の特別会員に選ばれた最初の女性のひとりであった²¹ことを踏まえて、19世紀に社会進出を果たしたフェミニスト²²としての一面をその伝記中で取り上げた。他に加納孝代²³、楠家両氏もこの面に言及している。しかしパット・バーは「(バードは) この問題(女性の権利)を真剣に考えていなかった」²⁴と書いている。彼女のフェミニストとしての一面が顕著に現れているのは『朝鮮紀行』²⁵であろう。バードは「女」や「子ども」に目を向けたといわれているが²⁶、実は彼女が子どもたちの遊びや生活を生き生きと描写しているのが*Unbeaten Tracks in Japan*の特徴の一つなのである。ロッキー山脈や朝鮮紀行にも、確かに子どもという単語は多く見られる。しかし子どもの服装・頭髪といった外面的記述がほとんどでその生活や遊びの内部まで踏み込んだ描写は見られない²⁷。それに引き換えバードは日本の子どもに深い関心を示している。

Ⅲ. 描かれた碓ヶ関の子どもたち — 明治11年の碓ヶ関

1) 碓ヶ関

(1) 幾つもの偶然による碓ヶ関を通る旅と逗留

1877年、医者薦めで旅に出ることを考え始めたバードは最初アンデスへの旅を思い立った。し

かしチャールズ・ダーウィン²⁸は、英国人がまだ旅をしたことのない日本の奥地への旅を薦めた²⁹。彼女は40通もの有力な紹介状を手にもって日本にやって来た。東京では、ハリー・パークス英国公使が事実上は無制限とも言うべき旅券を手に入れてくれた。これによりバードの羽州街道を北へ向かう旅は可能になった。日光から新潟を経て、そこから汽船で彼女の旅の目的地でもある蝦夷へ向かうつもりであったが、蝦夷行きの蒸気船が一ヶ月近くも出ないことが判明し、旅程を変更した。彼女は旅の従者としても通訳としてもかけがえのない存在となった伊藤³⁰を連れ、65ポンド（約30kg）に減らした荷物と、完璧に蚊から守ってくれる蚊帳を持って未踏の地へと出発した³¹。この偶然から発した青森へ向かう旅は、事実上外国人の目から見たこの時代のまたとない紀行となったのである。そのとき彼女の荷物に入っていたアジア協会誌にはJ. H. Gubbinsが“Notes of journey from Awomori to Nigata, and a of³² visit to the mines of Sado”を載せている³³。しかし明治初期の東北の人々の生活を生き生きと記述したのは彼女を除いてはいない。

すでに天気の良いなかった新潟を出て以来、たびたび大雨が彼女を襲う。碓ヶ関で4日間を過ごすことになったのも洪水により道を阻まれたからである。久保田（秋田）でも同様に先へ進みたい彼女の気持ちと裏腹に雨が彼女を押しとどめた。はからずも時間のある滞在になったことがこの紀行を興味深いものにしたとは言えないだろうか。

(2) 大雨の矢立峠を越えて

1878年7月30日の津軽地方は大雨で、その記録が公文録³⁴にも残るほどの水害があった。その大雨の中をイザベラ・バードは出来たばかりの新道を通り、矢立峠を越えていた。そこを「船のマストのように真っ直ぐに立つ巨大な杉に覆われ、うす暗く厳かである」と彼女は表現した。雨脚が強くなり、最後の川を渡るために彼女は馬に結びつけられた。この日の水害は公文録に「畝満面滄湖ノ如ク漲流人家ヲ侵シ困難之状態」（洪水の詳細は齋藤・高畑（2005），pp.45-46）と記されている。田畑を湖のように満たす洪水がこの地方を襲っていた。「日本で水の恐ろしさを少なからず知ることになった」と彼女はいう。山崩れが起き、立ち木を流し、峠で切り出された材木が平川を流れて橋を壊し、村は孤立した。この災害に気をとられた大群集は、今渡って来た橋が崩壊するのを見物している彼女の存在に気づかなかったとも書かれている。いつも物見高い大勢の人々の視線に曝されていた彼女には特筆すべきことだったろう。結局、水が引き歩いて渡れるようになるまで碓ヶ関に滞在することになる。

(1) 宿屋と亭主・戸長について

びしょ濡れになって、彼女は宿屋に辿り着き、梯子で上っていく屋根裏のあわれな部屋に入る。このような部屋は、当地では馬小屋の上であり、梯子で上る「仮子」³⁵の部屋であった。この日、雨で足止めされた客が多く、また浸水していたことからこのような部屋に泊まることになったのではと考えられる。現地調査で、彼女の宿泊先を探してみた。その宿屋は葛原旅館（現在は一般住宅になっている）といい、平川に沿った羽州街道に面した碓ヶ関の中心部にあった。名主や戸長を勤めた葛原家から分家した葛原大助とその妻志美（スミ）が旅籠を営んでいた。子どもは二人いて、その時、12歳だった長女きん³⁶はバードからクリスチャンのカードを貰ったことや、よく部屋に行き、食事も運んだことを孫娘の麗子³⁷に伝えている。そのカードはなくなってしまったが、そのとき「これは、後の世のためになりますよ」といってバードから渡されたことをきんは、孫達に話したという。バードが毎日話をしたと書いているもう一人は戸長の葛原伊惣助³⁸で、大助（宿屋の亭主）の兄である。街路を挟んでほんの数分の距離に伊惣助は屋敷を構えていた。戸長、郵便局長を勤め特に明治11年には学校係や学田係を任されており学事には関心が深かった³⁹。バードの話相手となった伊惣助と大助が当時の教育や子どもについて話したとしたら、碓ヶ関からの手紙に子どもや学校についての記述が多いことも不思議ではない。伊惣助は文政7年（1824）の生まれであるから明治

11年には54歳、47歳のバードと年も近かった。大助の娘さんは慶応2年（1866）生まれである。バードの言う「この宿屋には12人の子どもがいて」という子どもの数は、亭主の子どもという意味ではなく、12人の中には外国人珍しさに来た親類や近所の子どもが入っているのだろう。

注：邦訳では村長にコチョウとカナが振ってあるが、実際に戸長（副戸長）であったので以下は戸長とする。

(4) 林業の村

彼女は「子どもたちが遊ぶのや屋根板を作るのを見る。おもちゃやお菓子を買って、それをくれてやる。」と述べている。子どもの遊びに関しては次章に譲るとして、屋根板を作っているとはどういうことなのであろうか。碇ヶ関は山林面積が村の9割を占め田畑の少ない林業の村である。江戸時代から矢立峠周辺から切り出された杉は材木や屋根板（桎）に製材されていた。先の葛原旅館の明治末から大正にかけての写真が残っていて、森林軌道が敷かれ、前には材木が積んであるのを見ることが出来る。彼女が「あらゆる形をした材木 — 丸太、厚板、薪束、屋根板など — が山のように積み重ねてあった。ここは永住の村というよりは材木切り出しの野営地のように見えた。」と述べているように、古くから山林に依存する村であった⁴⁰。

(5) 碇ヶ関の店 — 玩具やお菓子と遊び

次におもちゃやお菓子を買った店とはどこにあった店なのであろうか。『新選陸奥国誌』⁴¹には「山中の鄙邑なれとも旅舎の結構稍清飾し酒菓雜貨皆備りたれば長峰古県辺の村々よりも此の邑に入て用を便し」と書かれている。酒、菓子、雑貨などを商う店があり、近隣の村々から買い出しに来ていた。彼女の宿泊していた葛原旅館の真向かいには、雑貨を商う北平商店⁴²と細長い街路を挟んだ弘前よりに工藤商店⁴³が営業していた。「ケンコウさま」と今でも呼ばれる店は明治の初期からあり、工藤四郎兵衛の家から独立した工藤兼弘が始めた。彼は羽織袴で戸長役場に通り、店は彼の家族（妻）が営み、量り売りの醤油・味噌、油や雑貨をはじめ、子どもの玩具、お菓子を扱っていたという⁴⁴。これらの店でバードはどんなものを買って子どもたちに与えたのだろう。

碇ヶ関での調査では、明治末生まれの人たちは、「ビタ（メンコ）」や「アンコ（おはじき）」を店で買ったということである。この頃（大正時代）になると「ガラスアンコ」と言う言葉が使われていた。まだガラスのおはじきは珍しく昔からの泥アンコとは区別されていた。バードが来た明治11年には、「壁アンコ」と呼ばれる土製のおはじきである。表面に「いろはに…」、「巴」の文字や「大黒」、「えびす」などの面がついていた。メンコも紙製ではなく、土製のメンコで、江戸時代から泥製の面形のもを上から落とす（面打ち）という遊びがあった。これらの玩具は弘前市^{しもかわら}下川原焼き⁴⁵の高谷家で作られていた。下川原焼き6代目高谷信夫氏の話によると、明治の末期まで秋田の能代、大館等に相当取引があり、玩具は背負子^{しよいこ}が冬は津軽地方内を、春は秋田方面へと売り歩いていた。また「ずぐり」と呼ばれる「こま」も売られていた。明治の頃には、弘前から秋田までの道筋の村々ではこのような玩具が商われていた。これらから、売られていたおもちゃはこま、土製のおはじき、土製のメンコ、張子の面、首人形、凧、花火等ではないかと推察される。

このほかに子どもたちはどんな遊びをしていたのだろう。この村の明治生まれの木村さんや山田さんの話では、彼らが遊んだ時代（大正初期）にはこの地方で「ビタ」と呼ばれるメンコ、「こうがいさし（コゲ打ち、クギおい、クギ刺し）」⁴⁶など勝負を競うゲームがあったようである。「こうがいさし」とは木を削り先を鋭く尖らせた細い木を地面に投げつけ他を倒して競う遊びである。この名称は女性の髪を飾る「こうがい（笄）」に由来している。明治初期にはこの遊びは明治の文明開化に反するものとして、布令により禁止されていた。明治8年11月10日に「釘逐笄撃ノ遊戯ヲ申禁ス」⁴⁷という布令がでた。これは前年の禁止令にもかかわらず、今もって子どもたちは「こうがいさし」を止めないので父兄は一層の注意をするようにとの内容のものである。実はこの遊びは江戸時代からあり、長さ8寸ほどの鉄の釘が使われていたが、天保の末にこれが、往来を歩いていた子ど

もの片目にあたり失明した、それにより鉄製のものは廃れ、木製品が売られるようになり、引き続いて遊ばれていたと『弘藩明治一統誌』⁴⁸にある。女性の白戸⁴⁹さんは「アヤコ（お手玉）」、「したご（紙風船）」⁵⁰を覚えていた。津軽では、お手玉を「あやこ」という。これもよく子どもたちに遊ばれたものである。『嬉遊笑覧』には、「あやをつく」という遊びが紹介されている。「…輕輕にてハさまざまみごとなる絹にて丸く袋に縫その内に鈴と赤小豆又ハ錢などを入れて是を手玉としその數三ツばかりハ片手にてつき五ツよりも以上ハ兩手にてつく是をあやをつくといへりその突やう兩人にて一人づゝ是をつく一二と數へて落る迄ハつくなり數多きを勝ちとす」とある。白戸さんは自分でアヤコを縫って、裁縫を覚えたという。また、紙風船は富山の薬売りのおまけであった。その販売網は全国にまたがり、江戸時代から明治の初期までは当時の最新の出来事を版画にしたものをおまけとしていたが、明治の初期から徐々に紙風船に替えていった（富山売薬資料館）。

Sweetmeatsと表現されている菓子は、飴類や餅・煎餅類と考えられる。青森県史にも弘前藩時代の記述として飴、おこし、あられ、竹流し⁵¹、饅頭や餅類が店で売られていたことが記載されている。今年創業150年を向かえる嘉永7年創業の弘前市亀甲町の石崎弥生堂でも、飴やおこしを製造していたという。『弘藩明治一統誌』に、蒸菓子、干菓子、雑菓子、餡製の羊羹が記されている。『青森縣治一覽表』⁵²をみると明治11年の菓子卸売の項目には県下で営業人員204人、収入高357円が把握されている。またバードは青森の特産として「大豆と砂糖で作られる菓子」⁵³をあげている。彼女の他地域での、菓子の表現をみると黒豆と砂糖で作った菓子（今市）、豆と砂糖の菓子、米麦と砂糖で作られたお菓子や餅（日光）、砂糖と麦粉で作ったお菓子、砂糖でくるんだ豆や卵の自身と砂糖で作った薄い軽い焼き菓子（津川）、白くて泡のようなお菓子（上ノ山）とかなり具体的表現をしているが、碓ヶ関での記述では単にsweetmeatsとなっているので、あめ玉を買い与えたというくらいの意味であろうか。

2) 碓ヶ関の子ども

(1) 明治11年の学校事情

村内には明治7年に発足した碓ヶ関小学校があった。バードの来た明治11年には旧番所跡に新校舎が完成したばかりであった⁵⁴。『縣治一覽表』には教員男子2名、生徒男子67名が記されている⁵⁵。同表の学事統計によれば、県内に小学校は138校（うち南津軽郡⁵⁶49校）あった。就学状況は表1に示した。また授業料は明治10年2月の小学校則改正では、碓ヶ関は1ヶ月10銭と定められていたがこの金額は実際に徴収された金額ではなかった。前野喜代治⁵⁷は明治7年から11年にかけての授業料を5銭から7銭と算出している。また牧野吉三郎⁵⁸は徴収授業料を生徒数で除する方法で青森県の公立小学校平均授業料を算出し、11年度には平均21.27銭とかなり高い額になっていたのではないかとみている。

表1. 學事統計第一四番中學區（碓ヶ関を含む学区）（単位人）

項目	学 齡 人 口	学 齡 就 学	学 齡 不 就 学	満 6 歳 以 下 就 学	満 14 歳 以 上 就 学	就 学 率 (%)
男	16,842	7,005	9,837	96	370	44.35
女	15,717	672	15,045	21	6	4.45
合計	32,559	7,677	24,882	117	376	24.35

『青森縣治一覽表 明治11年』により作製

注：学齡人口中の就学率は男子 41.59%、女子 4.3%（学齡外就学を除いて計算した場合の就学率）

当時碓ヶ関では、就学年齢の男子の半数以上は学校に行っておらず、ほとんどの女子は就学していなかった。私たちの聞き取り調査でも、現在92歳の女性は就学せず、12歳で仮子（借子）として親戚の家に「アダコ（子守）」に出され、一日中赤ん坊を背に、水汲みなどを手伝い、夜は藁打ちを

したという。そのあたりの事情は青森県の明治九年学事年報にも「年齢一二三才ニ至レハ市町ハ手代丁稚等ニ遣ハシ村落ハ家業（田野又ハ漁獵）ニ従事シ下等学科半途ニシテ退学スルヲ以テ卒業スル者少ナシ」と記されている。12、3歳の子どもたちは、男児の場合、都市では丁稚として農漁村では家業に従事する労働力であった。女子の場合も同様に「アダコ（子守）」として雇われ、家事・軽作業に従事していた。

(2) 学校に関する記述

明治初期の学校制度に立ち戻ってみると、明治5年（1872）に学制が頒布され、青森県には翌年24の小学校が開学した。その年7月「小学校則」⁵⁹が制定され学校運営はこれに基づき行われていた。しかしこの規則は児童を労働力として必要としていた農村部の実情に合わず、明治10年2月（1877）に「村落小学校教則」⁶⁰が出されることとなった。これにより従前の教則と併用して地域の実情にあった学習内容及び時間等の配分が可能になり、まさに多様な教育が行われることになった。さらに学制から数年を経て現実と乖離した制度は行き詰まり、明治11年5月14日に文部省から学制改革案としての「日本教育令」⁶¹が太政官へ稟議されると、同年5月23日には学制に規定された小学教則・小学教則概表が廃止された⁶²。ついで明治12年9月29日には当初の学制が廃止され、代わってそれまでよりゆるい教育令が公布された⁶³。つまりバードが碇ヶ関を訪れた11年8月は新旧の学校制度の狭間であり、国策としての文教政策の基本が示されず、従前の2つの教則がゆるい形で施行されていた時期である。

①宿題と「おさらい」の声

読本の声を耳にしたバードは次のように書いている。

「休暇になっているが、「休暇の宿題」が与えられている。晩になると、学科のおさらいをする声が、一時間も町中に聞こえてくる。」（バード pp.313-314）「子どもたちが学課のおさらいをする声を聞くのもこれが最後である。」（バード p.316）この原文は、I hear the hum of the children at their lessons for the last time, …（Bird p.369）である。

また彼女は碇ヶ関だけではなく、日光でも「学課のおさらいをする声」を聞いたと書いている。これらの文からは休暇中も読本する勉学に熱心な日本の子どもたちの姿が浮かび上がってくる。

明治10年（1877）の「村落小学校教則」には「童子ノ時ハ文字ヲ読テ得ル所ヨリ耳ニ聞テ得ル所ノ多キニ若カズ…」とあり音読による学習が奨励されていた。これに先立つ明治6年（1873）の「小学校則」の日課表では毎日「八時ヨリ九時、九時ヨリ十時」が読み方にあてられていた。また規則にはないが「朝読」と称して生徒は夏期には日の出前に出校して大声を上げて読書し、朝食に帰宅し、朝食後改めて定刻（午前八時）までに登校する習慣が寺子屋時代からの弘前地方の伝統としてあった⁶⁴。この素読の音を高い朗読音、あるいはhum（ブンブン言うような音）とバードは表現している。日本語を理解しないバードが虫の声（hum of insect⁶⁵）も素読も同様の音で表現しているのは面白い。時は移るが明治35年に正岡子規もその死の4日前に「朝の声も聞こえてくる。南向この家では尋常小学校二年くらいな声で、教科書のおさらいを始めたようである」⁶⁶と口述しており、町中を流れる子どもの読本の響きは明治の日本の風物詩だった。

当紀行文に子どもたちの「おさらい」が最初に出てくるのは、バードがこの旅を始めて⁶⁷まもなく日光の部分である⁶⁸。「高い単調な鼻声で明日の学校の予習をしている。by reciting them in a high, monotonous twang」「夕方になると、ほとんどの家からも、予習して本を読んでいる単調な声が聞こえてくる。in the evening, in nearly every house, you hear the monotonous hum of the preparation of lessons.」、このようにmonotonousという形容詞が付いているが碇ヶ関ではこの「単調な」が抜け「おさらいの声を聞くのも今日が最後である」と名残り惜しそうである。

しかし一方で、このおさらいの声は日本文化の伝統によるものというより、明治政府のとった政

策によるものであったのだ。文部省は学制期の小学校教授法政策として米国型⁶⁹を取り入れた。その根幹には、あらゆる認識の基本は数と形と音（ことば）にあり、教科に入る前にこれらの基本を感覚的に育てる必要があると強調したペスタロッチ⁷⁰の直観教授思想があった。つまりペスタロッチが音から文字へ、語へ、そして文章へと順序づけた考え方を取り入れた結果であった⁷¹。

②試験について

ところで、バードは試験時期について、「休暇が終わって学校がまた始まると試験がある。学期の終わりに試験があるのではない。これは学生たちに休むことなく知識を増進させたいというまじめな願望を示す取り計らいである。」（バード p.314）と述べている。

学制に基づき、明治6年に青森県に小学校が開校すると同時に「小学校則」⁷²が定められた。その第十二則「小学生徒心得」の第十四条には、「毎六ヶ月の試業を大試とし生徒の階級を進退し毎月末の試験を小試と名付け級中の順序を進退し以て生徒を競はしむるの一法とす」とあり、進級試験となる大試験と、級中で競わせる小試験が明記されている。明治9年7月には、「小学試験規則」の県布達が出され、試業規則、定期試業方法、点検法、各級毎の試験法、大試業など細部に渡る規則⁷³が定められた。

これには、毎月末に行う小試験（教師が行う）、5月、11月の2回、または6月、12月の2回のどちらかに行われることになっている定期試験（学区取締は勿論戸長が臨席する）、下等・上等小学校の卒業試験となる大試験（学区取締、第五課官員、師範学校校長或は訓導が臨席する）の三種類の試験が記され、日程が明記されている。「小学試験規則」の第6条は12月に布達があり、「第五課及師範学校ヨリ臨席点検スベシ」⁷⁴と改定された。明治10年1月には「村落小学校則」が定まり、教育内容も村落の実情に合わせてゆるやかになった。ここまでの小学試業規則では、学期末に進級試験を行うので、バードの記述とは合わない。

明治11年1月23日に小学校定期試験期日通達があり、各区毎に試験の月が定められた。それによると定期試験は各校で年に2回ずつあり、県下では6月、12月を除く全ての月に渡り、試験をしていた。日程は次のようである。

表2. 明治11年試験日程

出典：『青森県歴史』第五巻 青森県文化財保護委員会 1969 pp.324-325

○一月廿三日（明治11年管内布達留）					
小学校定期試験期節の儀当分左の通相定候条此旨相達候事					
一月	七月	三大区市街	二大区全	当分浪岡藤崎を除く	
二月	八月	一大区市街	五大区全	四大区全	当分十三深浦を除く 七大区全
			八大区全	九大区全	
三月	九月	三大区村落	二大区全	九大区同	八大区全
四月	十月	五大区村落	四大区同	七大区全	六大区 市街村落
五月	十一月	一大区村落			

碓ヶ関は二大区村落に属するので、3月と9月に試験が行われたことになる。つまりバードが述べているように、休暇の後に試験があったことになる。

当時、小学校の試験はニュース性があり、発刊間もない北斗新聞⁷⁵にも記事になっている。幾つか例を挙げてみると、第六区一小区の城ヶ沢村では4月に全校生徒の定期試験があり、下等八級の試験に22名が合格、2名の落第があったことが報じられている（11・5・17、北斗）。大五大区三小区では鶴田・金木で臨時試験があったことが報じられている⁷⁶（11・7・17、北斗）。新聞にも掲載され

ほどの関心事であった学校や試験についてバードが学校掛、学田掛⁷⁷を申し付けられていた葛原伊惣助と話し合ったことは想像に難くない⁷⁸。

③夏季休暇について

彼女の逗留中は休暇（the holidays）であったと書いている。当時の青森県の小学校には現在のよ様な夏季休暇があったのだろうか。『三戸小学校沿革誌』⁷⁹に明治7年7月22日の記録として夏季休業について以下のような記録が残されている。「7月二十二日 来ル二十五日ヨリ八月三十一日マテノ間日数十五日間適宜ヲ以テ休業セシムベキ旨達セラル因テ七月二十八日ヨリ八月六日マテ十日間八月二六日ヨリ三十日マテ五日間休業ス」。これによると布達により休暇が設けられたことになり、実際に7月28日～8月6日、8月26日～30日の2回に分けて計15日間の休暇があったことになる。青森県史資料の明治9年の欄には次のような布達が記されている。

七月二十二日（明治9年管内達留抜粹）⁸⁰「自今毎年七月廿五日より八月三十一日迄の内日数十五日間各小学暑中休暇の儀適宜可取計此旨相違候事」。これは明治9年の布達であるが、三戸小学校の記録から同様の布達が明治7年にもあったと考えるべきだろう。ここでは、暑中休暇という言葉が使われている。「夏休」という言葉が使われるのは、明治10年2月28日に、布達第九十一号、「小学校則別冊之通相定候条此段相違候事」が出され、そのなかで、「開校閉校及夏休日」⁸¹が定められたことによる。「一 夏休八月一五日ヨリ同月三十一日迄」とあり、ここではじめて「夏休」という言葉が使われた。先の布達（明治9年）の日程はバードのいう休暇と合っているが、この規則では、日があわない。しかし、明治11年に青森県は「小学規則」についての上申書を出しているが、その中に「夏中就学ヲ休ムノ風ハ漸次相改サセ追々就学督促…」（文部省日誌明治11年第I号）⁸²とある。この文章からは、夏休みはなく、児童は夏中勝手に休んでいたように読み取れる。同上申書には、「初夏挿苗ノ頃ヨリ幼稚の者タリトモ悉皆農事ニ就キ登校ノ日僅少ニ付…」とあり、子どもたちは勉学より労働力としての役割を担わされていたことが分かる。こんな状態で、近隣の村の名前も読めないようでは不都合だから、新たに教則を設け適切な教授を施したい、というようなことが書かれているので、この頃は夏の間も勉学を続けさせようとの意図があったようである。先の布達の日程によるものか或は、上申書にあるように、休暇とは関わりなく休んでいるのかは判断が難しいが、少なくとも当時「夏休」はあり、またそうでなくても子どもたちにとって「休み（学校へ行かない）」であったことにはかわりがない。学校制度の始まりと時を経ずして、「夏休み」がもうけられていたのである。

(3) 衛生状態について

子どもの衛生状態についてバードは「石鹸がないこと、着物をあまり洗濯しないこと、肌着のリンネルがないことが、いろいろな皮膚病の原因となる。虫に咬まれたり刺されたりして、それがますますひどくなる。この土地の子どもは、半数近くが、しらくも頭になっている。」（バード pp.311-312）と書いている。彼女が来た7月末から8月にかけてはまさに蚊の大群に襲われるような季節である。その辺をほぼ裸で走り回る子どもたちは虫刺されでひどかったに違いない。皮膚病に加えて天然痘の痕もひどかった。明治12年の青森新聞⁸³には、「新鮮な痘苗が入る（県立青森病院の広告）（12・4・18）」「早く種痘をしなさい（12・4・24）」などの記事が見られ天然痘の流行があったことが察せられる。

また明治6年の小学生徒心得をみると、第1条に「毎朝、顔と手を洗い、口を漱ぎ、髪を梳かし…」、同第9条に再び「毎日よく顔手衣服等を清潔して登校すること」などと書かれていて、衛生教育も始まりつつあったことが分かる。

一般家庭は富山の薬売りが持ってくる売薬や民間薬に頼っていた。彼らがおまけとしてくれる紙風船の遊び歌はこのあたりでは「したご（紙風船）にふきでもの出たど、痛いともいわずにただ泣

くばかり」と歌ったという。ポンポンとほおり上げられる紙風船の腹に吹き出物がでても痛いといえないでキュッ、キュッと泣くだけだという意味で、ここに当時の子どもたちが吹き出物に悩まされ、またこの風船を手のひらで弾ませると音がして面白かったことが分かり、興味深い謡である。また石鹸がないと書かれているが、『縣治一覽表』の明治11年には、中津軽郡に石鹸製造所が一箇所あったことが記載されている。

〈紙風船遊びの歌〉

碓ヶ関「シタゴノハラサ デギモノ デギダッキャ イデドモイワズ タダナクバカリ」
 (碓ヶ関村聞き取り調査)
 青森市「フタゴヤ、フタゴ、ミワダスヨネゴ、イツイッムサシ、ココノイノイッチョウ」⁸⁴

(4) 子どもの服装について

「子どもには特別の服装はない。これは奇妙な習慣であって、私は何度でも繰り返して述べたい。子どもは三歳になると着物と帯をつける。これは親たちも同じだが、不自由な服装である。この服装で子どもらしい遊びをしている姿は奇怪なものである。しかし私は、私たちが子どもの遊びと^{グロテスク}いっているものを見たことがない — いろんな衝動にかられてめちゃくちゃに暴れまわり、取っ組みあったり、殴りあったり、転げまわったり、跳びまわったり、蹴ったり、叫んだり、笑ったり、喧嘩をしたりするなど！」⁸⁵と彼女は述べている。

当時は、まだ大人も子どもたちも和服を着ており、特に子どもの姿は、彼女の目には奇異に映った。キモノを着た子どもたちが元気に遊び回る姿が見られたのだろう。しかし、その中でバードは子どもたちが転げ周り、取っ組みあったりする姿を目にしていなかった。子どもたちはいつでも大人の居るところでは、そのようなことはほとんどしなかったのだろう。子どもたちがおとなしかったというよりは、外国人の前で緊張している子どもたちの姿があったのではないだろうか。この村での私たちの調査では、皆元気を取っ組み合っていたと話してくれた。その頃の子どものキモノといえは丈の短い色調の暗いものか緋である。しかも彼女が来た8月の初めは最も気温が高く蒸し暑い時期であり、ほとんど裸の格好でいただろう。

また異なった見方もあるので紹介しよう。楠家重敏によるとグリフィスの「日本の子供の遊び」に関する論文が読み上げられた1875年3月18日のアジア協会では、子どもの文化について討論されたという⁸⁶。そこでエアトン夫人⁸⁷は「(日本の) 子供の着物はゆるやかで、しかも温かい。外国の子供の服装よりも快適である。」と言い、日本の子どもが他の国々より幸福な理由のひとつに和服を挙げている⁸⁸。バードとは全く反対の感想を持っているのは面白い。ただし、バードは、奇妙だといっているが快適さを問題にしているのではない。彼女もまた、荷駄を引く3人の少女の姿には、見苦しいが「きついスカートとハイヒールのために、文明社会の婦人たちが痛そうに足を引きずって歩くよりも、私は好きである。」⁸⁹と述べている。彼女が繰り返し述べているのは、大人と子どもの服の区別がないことである。当時の英国では両者の間に明確な違いがあったということであろう。我が国においても年齢や属性により、服装は江戸時代から厳しく定められており、髪型、着衣による違いはあったのだが、和服としては同じように見え識別できずに目に焼き付いたものと思われる。

IV. 子どもの遊びについてのバードの記述

碓ヶ関部分で子どもの遊びは具体的に4つ挙げられている⁹⁰。第一は甲虫とキリギリス、第二におもちゃの水車、第三に凧と竹馬⁹¹、最後にいろはがるた⁹²が出てくる。しかし当時の子どもの遊びに関しては公文書や統計資料がほとんどない。そこで、かつての碓ヶ関・津軽の子どもの遊びが

どのようなものであったかを高齢者の話⁹³や津軽の文献（大正、昭和初期を含む）に基づいて比較検討した⁹⁴。また、禁止の布令、警察資料⁹⁵、新聞記事と『弘藩明治一統誌』⁹⁶を主な確認手段として使った。

さて彼女の描いた碇ヶ関の子どもたちを見ていこう。

(1) 甲虫とキリギリス

「頭のよい少年が二人いて、甲虫の背中に糸をつけて引き綱にし、紙の荷車をひっぱりさせていた。八匹の甲虫が斜面の上を米の荷を引きながら運んで行く。英国であったら、われがちに掴みあう子どもたちの間にあって、このような荷物を運んでいる虫の運命がどうなるか、あなたにはよくお分かりでしょう。日本では、たくさん子どもたちは、じつと動かず興味深げに虫の働きを見つめている。「触らないでくれ！」などと嘆願する必要もない。⁹⁷」

この記述では、8匹のカブト虫に紙の箱を引かせているのだが、荷は米である。また8匹のカブト虫に車を引かせる情景は壮観であったろう。この地域の聞き取り調査では、カブト虫を捕った経験があり、よくケンカをさせたという。ツノとツノで戦わせるのである。また他の地域では、荷駄として、穀のついた豆を引かせる、マッチ箱に糸を付けて引かせるなどほとんど似た遊びが近年まで見られたという。青森県の遊びを集めた『オモチャッコ』⁹⁸には、「カブト虫の角の部分に木綿糸をゆわえつけ、その糸になにか小さな物をしばって引かせて喜んだり糸を長めにして空中にぐるぐるまわすと、カブト虫は驚いてか薄茶色の羽をひろげて飛ぼうとする。これもおもしろかった。」とある。ところで余談ではあるが、カブト虫に荷を引かせる実験を試みたと、一匹でも十分に100gの米を積んだ荷を引けるほどの力があることが分かった。

次の「キリギリス」に関しては「たいていの家には竹籠があって、「鋭い音をたてるキリギリス」を飼っている。子どもたちは、この大声を立てるキリギリスに餅をやるのを楽しみにしている。」とバードは書いている。『津軽口碑集』⁹⁹には、キリギリスに関し「ぎつ（キリギリス）は野に多し。…このぎつを捕らうるには、木片の先端に真綿を巻き、これよりすこし手もとちかくみそをぬりて、この棒を虫にちかずくれば、ぎつは躍り来り足に真綿がからまりて進退を失う」とある。子どもたちはキリギリスを捕って遊んでいたのである。またカマキリ、バッタ、セミ、カミキリムシ、ホタルなどの虫で子どもたちが遊んだことが『オモチャッコ』には記されている。碇ヶ関での聞き取りでは、あまりに沢山のキリギリス、コオロギやトンボがいて、飼うといよりは、ほどんどむしって遊ぶほどであったという。津軽地方にはこの地方独特の細い根曲竹を使った竹カゴがあり、虫カゴも根曲竹か藁で作ったものだった。根曲竹のカゴは現在も岩木山麓で作られている¹⁰⁰。

ところで、バードがもっとも感心しているのは、8匹のカブト虫が車を引いていくことにではなく、それを取り巻く子どもたちの態度である。英国の子どもと比較して、行儀よく、じつと見ている姿に感嘆しているのである。同様の感嘆が後述の凧にも出てくる。

(2) おもちゃの水車と削除された部分（栃木県）の水車

「街路にあって速く流れる水路は、多くのおもちゃの水車を回している。これがうまくつくられた機械のおもちゃを動かす。その中で脱穀機の模型がもっともふつうに見られる。少年たちはこれらの模型を工夫したり、じつと見ながら、大部分の時間を過ごす。それは実に心をひきつけるものがある。」¹⁰¹と子どもたちの様子を書いている。同様の記述は日光（バードpp.118,121）にも見られる¹⁰²。いずれの記述も水車を動力としたメカニカルな玩具であることと、少年達が考案したものであることに共通性がある。

話を碇ヶ関に戻そう。そこでは子どもたちにとって水車はどのようなものであったろう。明治生まれの高齢者の聞き取り調査では、彼らはおもちゃの水車で遊んだことはなかったという。全国の

水車が記されている『共武政表（明治11年）』の碓ヶ関の欄をみると空白である。林業を主としていたこの村は、青森県の穀倉地帯といわれる津軽にあって特に水田が少ない。また平川の上流にあり水利がよく、津軽の他町村で見られたような足踏み式の揚水水車もなかったということであった。

『永楽日記』¹⁰³には「上方より水車一を下し是を手本二…」とあり、はじめて水車を製作し「足をふみ車と云」ったことが記されている。安政元年（1854）には岩木町に水車が作られた¹⁰⁴。また黒石市には、明治12年5月付けの水車の利用料に関する約定書が残っている（黒石市史 通史編Ⅱ、1988）。碓ヶ関で最初に脱穀用の水車をはじめ現在も精米業を営む一戸家（現清一郎）は、当時から現在に至るまで水車（みずぐるま）という屋号で呼ばれているが、創業は明治の終り頃であり、バードが来た頃は、村に水車はなかったという。

子どもたちの遊びという点ではどうだろう。津軽の遊びを集めた北彰介によると柁（屋根板）を利用した水車で遊んだとある¹⁰⁵。しかし、バードが書いているような工夫された水車の模型を子どもたちが作るということは碓ヶ関では見つからなかった。

では彼女はどこで水車を目にしたのだろうか。栃木県の省略部分にも水車の記載¹⁰⁶があり、こちらは玩具ではなく実際に水田で使われている水車である。彼女が栃木県の水田地帯を通る時目にしたという揚水水車は、赤銅色の肌をした男達が下帯ひとつで動かす足踏み式の装置である。面白いのは、「真っ直ぐに立てた竹と横棒で上下段の水路が交わる場所に固定された踏輪がまるで囚われて、回転させられているようだ」とまるで水車が人であるかのように書いていることである。また鬼怒川沿いの藤原の道筋で、しばしば、自動精米機を目にしたと書いている。mysteriously fascinatingという表現でその魅力を書いているが、完全に閉めきられた小屋の中から、ドスン・ドスンという音だけが聞こえ姿の見えない不思議さを表している。「小川の水が丸太の先端のくぼみ、つまり角材に取り付けた杓子形の水受けの中に引き込まれていく様子にはだれでも引きつけられてしまうでしょう。」とその魅力を記しているが、その観察は「水でいっぱいになった杓子がゴトンと落ちて、もう一方の端の木槌が付いている梃子（横杵）が上がる。水の溜まった杓子は傾き、水が一気にこぼれ出す。そうすると木槌は米で満たされた臼の中に落ち、また杓子がいっぱいになると杵は持ち上げられと際限も無く繰り返します。ドスン・ドスンの間隔は水量次第というわけです。」¹⁰⁷と実に細かい。これらは無人の小屋の中で水量任せにのんびりと穀類を搗く単純な構造のままに子どもの玩具のようなものであった。以上は彼女の記述に沿ったものであるが、当時の水車事情はどうであったのだろうか。

わが国では、明治維新後、新しい動力源として水車が急速に普及した¹⁰⁸。農村型の水車とは異なる溪谷や川に並ぶ水車群が見られたのである。製材水車、線香水車（今市）、撚糸（長野県）や、製糸（栃木県、足利）、製麺と産業のあるところに唯一の動力として水車は発展していった。彼女が観察しているように、これらは上射式、下射式とそれぞれに稼動方法が異なっていた。彼女が羽州街道を歩いた明治11年は水車の普及期にあたる。そのような環境の中で子どもたちがおもちゃの水車を考案したとしても不思議ではないのだが、彼女の記述のような複雑な水車を子どもたちが作ったというよりは、むしろ小型の工業用水車や農業用水車を旅行の途上で、目にしたと考えるべきだろう。とすると当時、十代の少年たちは既に労働力の一部であった¹⁰⁹ことから、また彼女が子どもの遊びと考えた姿は、少年達の労働の姿であったと考えられる。

彼女が水車に強い関心を示し、また詳細な説明をつけたことには、宣教師であった父が彼女の関心を広く引き出すように教育したと関係があるだろう。いっしょに馬に乗りながら彼は「あの水車は上射式か下射式か」と質問したことが伝記¹¹⁰には書かれている。水車はバード自身のメカニカルなものへの興味と父への想いとが交差するもののひとつであった。そしてちょうど水車の全盛期を迎えようとしている日本の農村を旅し、水車を目にしたということでないだろうか。

(3) 凧

バードは「今日の午後は晴れて風があった。」という書き出しで凧揚げを書いている。①巨大な英雄の似顔絵、②竹の杵、③鯨のヒゲの唸り、④ガラスを練りこんだ糸、⑤敗者の凧は勝者の所有に帰すといった特徴が書かれている。ところがこの特徴が問題なのである。津軽地方では、凧は津軽凧の名称で親しまれ、江戸時代から津軽藩が葛飾北斎に凧絵を注文したというほど盛んであった。子どもたちはマッコ（お年玉）を貰うと子ども向けの半紙ほどの大きさの凧を買って揚げた。しかし凧揚げの季節は真冬の正月ではなく早春の堅雪になった田んぼか雪が消えたばかりの田んぼ、または稲刈り後の田んぼで、晩秋から初冬の北風に乗せるといったことも行なわれていた¹¹¹。『弘藩明治一統誌』には「紙鳶ハ冬十二月ヨリ三月ニ至リ男兒或ハ中年輩モ玩弄セリ…中略…大ナル者ハ西ノ内十八枚西十二枚張りアリテ中年ノ壯士綱引ヲテ是ヲ戯二三ノ人…略」と書かれていて大凧を揚げた事が記されている。

ところで青森県（津軽地方）の凧には青森凧、弘前凧の2系列がある。碇ヶ関は弘前凧の地域に入るだろう。主として「対の絵」（人物-人物、人物-動物）が多く、骨は「木板張り」と呼ばれるヒノキの柁目板を使う。日本の凧のほとんどは竹を使っているが北緯40度より北では竹が育たないため弾力性に富むヒバ材を薄く削って骨として用いるようになった。唸りは和紙を細くしたものを用いた。小田桐凧を研究した斎藤正の『津軽の凧と凧絵師の系譜』¹¹²によると「ぶんぶ＝うなりのことである。一番上の「タメ」の糸につける。古い日本紙のホゴ紙でつくり、それにショウチュウをふりかけたり、それに漬けたりして作る。仙花紙でつくった「ぶんぶ」が一番うなりが強いとされている。」¹¹³と記述されている。またビードロ（砕いたガラスを糸に練り混む）は使わなかった¹¹⁴。上記のことから、凧揚げは津軽の子ども文化を代表するもののひとつであるが、津軽の凧揚げ風景ではないという結論に達した。

では彼女の記述に該当するものを探してみよう。ガラスを使用し切り合う凧は、長崎のハタ、江戸中期の終り頃に創作された静岡県の相良凧、初凧に起源を持ち江戸時代1700年代より盛んになったという愛知県の田原のけんか凧が知られている¹¹⁵。また「唸り」に鯨のヒゲを用いたのは江戸時代から捕鯨が禁止される近年までの東京、長崎などである。しかし、ビードロと鯨のヒゲの両者を満たすのは「長崎のハタ（凧）」である。このことからバードが碇ヶ関で眼にしたと描いた凧揚げの様子は実は長崎のものではないかと考えられる。

明治大正を通じての趣味人として知られる淡島寒月¹¹⁶は明治初期の変わり近く江戸の姿を書いている。「凧の話」¹¹⁷と題されたものの中にビードロと鯨のうなりが出ている。

「長崎では「ビードロコマ」と云って雁木の代りにビードロの粉を松やにで糸へつけて、それで相手の凧の糸を摺り切るのである。「うなり」は鯨を第一とし、次ぎは藤であるが、その音が流石に違うのである。又真鍮で造ったものもあったが、値も高いし、重くもあるので廃って了った¹¹⁸。」

同様の文は『嬉遊笑覧』にもみられる。

〔長崎歳時記〕二月條此月より四月八日まで市中にて凧を放ち樂む快晴の日ハ金比羅山などへ行厨を携へ行てこれを放つ風巾の製一ならずばらもん劔舞箏冑ばらもん人道はた奴はた百足ばた蝶ばた障子ばた日本ばたあこばたかはほりばたとんぼうばた桐に鳳皇海老尻天下太平天一天上大吉等の文字を作るもあり又つるはかしと云事あり硝子を細末にして糊に和し是を苧よまに引つけ日に乾し風巾にかけて放つ硝子よまと云ふ手元ハ常の苧よま也互にこれを以て町をへだて谷をさかひて相かくる術の工拙ありよまとよまとすれあひ遂にきれ行を負とす又十日金毘羅祭禮參詣群集す麓の廣野に毛せんをまきへんとう携へ大人小兒凧をかけて勝負を争う此日市中に假店をまつらひ硝子よまはたを商ふ人々これが為に數百錢を費すといへり…（下巻p.144）…中略

弓はうなりなりその弦竹また銅にて作れるハこゝにてまゝ、これを用ふれ共大たいハ鯨鰓を用ゆ昔のハいかがありけんおもふ（下巻p.145） 注：長崎では凧をはたという。

バードの凧の記述に関しては、グリフィスから借用したと考えられる¹¹⁹が、彼が長崎の硝子で切

り合う凧についての情報を東京で得たとしても不思議ではない¹²⁰。これらの記述にあるように長崎の凧についての話は江戸・東京に伝わり、金毘羅神社の祭りと共に凧売りが仮店で数百銭も商うという話は江戸の噂に上っていた¹²¹。

在日した外国人で長崎の凧揚げの様子を記したのは、1860年にエルベ号で長崎に来たヴェルナー艦長¹²²である。彼は「何百という競技者が、快楽と野心にあおられて顔を紅潮させ、目をぎらつかせ自分の凧と敵の凧を見つめつつ、細い糸を器用にさばき、自由自在に凧を動かしていた。」と長崎の金毘羅神社での熱気あふれる凧合戦の様子を描写した。また、「火打ち石の粉末が紙でつくった凧糸に塗りつけられていた」とも書かれている。火打ち石が後にビードロになったと思われる。この凧合戦の英雄には惜しみのない拍手喝采と歓声がおくられ、艦長もまた我を忘れていっしょに歓声をあげたことが記されている。一方バードは息を殺して凧揚げを見ている人々の姿に驚いている。勝者と敗者の礼儀正しい挨拶はあたかも儀式を執り行うような鄭重さであり、それを取り巻いている人々が沈黙のまま歓声もあげることなく、ヴェルナー艦長の眼にした長崎の凧揚げと対照的である。

またブンブ（うなり）については、お雇外人の一人、E・W・クラーク¹²³が明治4年から同8年までの『日本滞在記』¹²⁴の中で「少年達は軽い竹のわくに丈夫な紙をはって、竜や武将のやお化けを描いたたこを持っている。そのたこのてっぺんには鯨のひげのリボンが張ってあって、それが風に振動して妙な音をたてる。わたしが初めて東京の町を歩いた時には空からきこえてくる不思議な音がなにか想像できなかった」と述べている。この音は東京の空の音であるから鯨のヒゲの「うなり」はこの時期東京にもあった。しかし明治10年には東京では凧揚げ、羽根つき、独楽回しなど、交通妨害の理由で路上遊びが禁止された。さらにクラークはガラスの破片を付けた凧揚げについてもグリフィスやバードと同様の記述を残している¹²⁵。

斎藤良輔¹²⁶によると日本から海外に向けて初めて玩具が輸出されたのは明治3年（1870）である。その第1号の輸出品目の中に紙凧も入っている。凧は当時の外国人の目に留まったもののひとつであった。

(4) カルタ

1巻本には無い部分であるが最初の2巻本の碇ヶ関の部分では、カルタとりの様子が書かれている¹²⁷。しかし、碇ヶ関での聞き取り調査ではカルタを探すことが出来なかった¹²⁸。カルタ取りの様子は生き生きと描かれ、彼女自身「すっかり気分がよくなって、その夕べをすっかり楽しみました。」とあるが、綿の採れない青森県で綿を梳いていることなど幾つかの問題がある。日の永い真夏の蒸し暑い夜にカルタをすとしたら、非常に遅い時間に蚊に喰われながらすることになるので現実的とは言いがたい。ここでもまた凧や甲虫と同様に、礼儀正しく見ている子どもや大人の姿がある。彼女が言いたかったのは、子どもを見守る大人の温かい目と家族が団欒する日本の風景ではないだろうか。

V. 子どもの遊びに関するバードとグリフィスの比較

バードは、碇ヶ関での子どもの遊びを具体的に4つ挙げている。4つのうち水車を除く3つについてはグリフィスも書いている。グリフィスの『明治日本体験記』は、1876年に *The Mikado's Empire* という題でニューヨークの Haper & Brothers から出版された。子どもの遊びとスポーツと題された第十章は、1874年の『アジア協会紀要』に掲載されたものと同じである。1874年7月5日に第2回日本アジア協会年総会が開催され、同時に *The Asiatic Society of Japan* (『日本アジア協会紀要』)、From 22nd October 1873, To 15th July, 1874が発刊された。この号には、グリフィスの 'The Games and sports of Japanese Children' が掲載された。バードは日本の奥地の旅行に際し、『日本アジア協

会紀要』を数冊携行している。碇ヶ関で雨に降り込められた彼女は、『アジア協会誌（日本アジア協会紀要）』を読んだ¹²⁹と書いている。またグリフィスとその著作“*Mikado's Empire*”については、彼女自身、“*Unbeaten Tracks in Japan*”のなかで述べている¹³⁰。

バードの*Unbeaten Tracks in Japan*は初版本と同時代にニューヨークのPutnam's sonsからも出版されている。この版では他の版とは異なり、Letter I、IIの代わりに内容の一部が章題になっている。碇ヶ関にあたるLETTER XXXIIIの章題はChildren's Gameとなっておりここでバードが子どもに主題を求めたことが分かる。バードがグリフィスからどのような影響を受けたのか、それが碇ヶ関における子どもの記述とどう関わるのか検証してみる。

以下はバードとグリフィスの対照である。

初版	『日本奥地紀行』 “ <i>Unbeaten Tracks in Japan</i> ”, John Murray 1880 by Bird, Isabella Lucy	『明治日本体験記』 ¹³¹ “ <i>Mikado's Empire</i> ”, Haper & Brothers 1876 by Griffis, William Elliot
章題	Children's Game (碇ヶ関部分 Letter XXXIII) Putnam's sons 版 (1880) につけられた章題	The Games and Sports of Japanese Children (十章の章題)。十章は『日本アジア協会紀要』 (1874) に掲載した同題の論文を再録したもの。
甲虫	Two fine boys are very clever in harnessing paper carts to the backs of beetles with gummed traces, so that eight of them draw a load of rice up an inclined plane. (p.364) 頭のよい少年が二人いて、甲虫の背中に糸をつけて引き綱にし、紙の荷車をひっぱらせていた。八匹の甲虫が斜面の上を米の荷を引ながら運んでいく。(p.313)	The bug-man harnesses paper carts to the backs of beetles with wax, and a half dozen in this gear will drag a load of rice up an inclined plane. (p.155) 虫屋がかぶと虫の背中にろうで紙の大八車をつけて引かせる。この装置なら六匹の虫で傾斜した板の上を車に米を積んでのぼるだろう。(p.455)
凧	This afternoon has been fine and windy, and the boys have been flying kites, made of tough paper on a bamboo frame, an of a rectangular shape, some of them five feet square, and nearly-all decorated with huge faces of historical heroes. Some of them have a humming arrangement made of whalebone. There was a very interesting contest between two great kites, and it brought out the whole population. The string of each kite, for 30 feet or more below the frame, was covered with pounded glass, made to adhere very closely by means of tenacious glue, and for two hours the kite-fighters tried to get their kites into a proper position for sawing the adversary's string in two. At last one was successful, and the severed kite became his property, upon which victor and vanquished exchanged three low bows. Silently as the people watched and received the destruction of their bridge, so silently they watched this exciting contest. (p.364)	About the time of the old New-year's, when the winds of February and March are favorable to the sport, kite are flown; and there are few sports in which Japanese boys, from the infant on the back to the full-grown and the overgrown boy, tat more delight. I have never observed, however, as foreign books so often tell us, old men flying kites, and boys merely looking on The Japanese kites are made of tough paper pasted on a frame of bamboo sticks, and are usually of a rectangular shape. Some of them, however, are made to represent children or men, several kinds of birds and animals fans, etc. On the rectangular kites are pictures of ancient heroes or beautiful women, dragons, horses, monsters of various kinds, or huge Chinese characters. Among the faces most frequently seen on these kites are those of Yoshitsune, Kintaro, Yoritomo, Beke Daruma, Tomoye, and Hangaku. Some of the kites are six feet square. Many of them have a thin tense ribbon of whalebone at the top of the kite, which vibrates in the wind making a loud, humming noise. The boy frequently name their kites Genji or Heike and each contestant endeavors to destroy that of his rival. For this purpose, the string, for ten or twenty feet near the kite end, is first covered with glue, and then dipped into pounded glass, by which the string

	<p>凧は竹の枠に丈夫な紙を張ったもので、すべて四角である。五フィート平方もあるのがある。ほとんどすべてが、歴史上の英雄の巨大な似顔を描いている。鯨骨^{注1}を使ってぶんぶん唸らせるものもある。二つの大きな凧の間に非常に面白い競争があった。それを見るために村中の人々が出てきた。どちらの凧の糸も、枠の下から30フィート以上も、砕いたガラスでおおわれ、これは粘り強い糊でぴったりと糸にくっついてた。二時間も凧あげ競技者たちは、相手の糸を真っ二つに切ろうと、うまい位置に凧を飛ばそうと努力していた。ついには一方がまくいて、糸を切られた凧を自分の勝利品とした。そして勝者と敗者は三度頭を深くさげて挨拶をかわした。人びとは橋が破壊されるときも黙って見つめていたが、このときも沈黙のまま、この手に汗をにぎる試合を見ていた。</p> <p>(p.314)</p> <p>*注1：原文ではwhaleboneで「鯨のヒゲ」である。</p>	<p>becomes covered with tiny blades, each able to cut quickly and deeply. By getting the kite in proper position, and suddenly sawing the string reclaimed by the victor. (pp.460-461)</p> <p>旧正月のころ、二、三月の風が好都合になると、凧が揚げられる。背中に背負われた幼児から少年や青年にいたるまで、これほど喜ばれる遊びはない。けれども外国の本によくあるような、大人が凧を揚げ、そばで子供が見ているといった風景には、お目にかかったことがない。日本の凧は竹の棒の枠に丈夫な紙を張って作るが、形はふつう三角形^{注2}である。けれども凧のなかには子供や大人、数種類の鳥や動物、扇子の形をしたものもある。三角形の凧には昔の英雄、美女、竜、馬、いろいろな種類の怪物の絵や、大きな中国文字がついている。凧によく見る顔は義経、金太郎、頼朝、弁慶、達磨、巴（御前）板額^{はんがく}の顔である。六フィート四方の凧もある。凧のてっぺんに鯨のひげの細くて強いひもがついていて、風にゆれるとぶんぶん大きな音を出す。子供は自分の凧を源氏とか平家とか呼んで両方に分かれて戦い、相手の凧をこわそうとする。この目的のため凧の端から十ないし二十フィートの糸にまず膠を塗り、砕いたガラスにつけると、糸には細かな刃がついて、早く深く相手の糸を切ることができる。凧を適当な高さにあげておいて、急に相手の糸を切ると、凧は糸を離れて落ち、勝った方がそれを再生利用する。(pp.158-159)</p> <p>*注2：原文ではrectangular shapeとなっており、訳文では三角形となっているが、四角（長方形）である。</p>
<p>カルタ</p>	<p>This game of I-ro-ha garuta, or Alphabet Cards, is played with small cards, each one containing a proverb. On another is a picture which illustrates it. Each proverb begins with a letter of the Japanese syllabary. The cards are shuffled and dealt, and the children appoint one of their number to be the reader. He reads a proverb on one of his cards, and the one who has the picture corresponding to the proverb read calls out. The one who first gets rid of his cards win the game, and the one who has the last card loses it. The game was played with great animation and rapidity, but with the host amusing courtesy. All the ugly, open-mouthed, kindly lookers-on were delighted. At the end the loser, who was a little girl, had a wisp of straw put into her hair; had it been a boy, he would have had certain prescribed ink marks made upon his face. (2vol. p366),</p> <p>注：abridged edition (2000) Letter XXVIII.</p> <p>(Continued) p.214の3行目につづく。 「いろはガルト」というのはわが国のアルファベットのカードにあたるものですが、一枚一枚</p>	<p>Iroha Garuta (Alphabet Cards), Hiyaku Nin Isshiu Garuta (One-Verse-of-One-Hundred-Poets Cards), Kokin Garuta, Genji, and Shi Garuta are played a great deal. The Iroha Garuta (Karuta is the Japanized form of the Dutch Karte, English card) are small cards, each containing a proverb. The proverb is printed on one card, and the picture illustrating it upon another. Each proverb begin with a certain one of the fifty Japanese letters, I, ro, ha, etc., and so on through the syllabary. The children range themselves in a circle, and the cards are shuffled and dealt. One is appointed to be reader. Looking at his cards, he reads the proverb. The player who has the picture corresponding to the proverb calls out, and the match is made. Those who are rid of their cards first win the game. The one holding the last card is the loser. If he be a boy, he has his face marked curiously with ink. If a girl, she has a paper or wisp of straw stuck in her hair. (pp.458 - 459)</p> <p>いろはがるた（日本語のかるたは、オランダ語のカルテ、英語のカードにあたる。）は小さな札で、その一枚一枚に諺が刷ってあり、もう一</p>

<p>に、ひとつのことわざが書かれた小さい札を使って遊びます。もう一組には、そのことわざの絵解きが描かれています。それぞれのことわざは、日本語の字音（いろは47文字）のどれか一文字から始まっています。札はてんをきられ、配られます。子どもたちは自分たちの中からその読み手を指名します。読み手は、手に持った読み札に書かれたことわざを読み上げます。取り手は読み上げられたことわざに一致する絵札を取ります。自分の持ち札が最初に無くなった者が勝ちです。最後の一枚を持っている者が負けということになります。</p> <p>中略</p> <p>おしまいに負けた子どもは、それは小さな女の子だったのですが、一握りの藁を髪に挿されました。もし男の子だったら、顔に墨で決まった印を付ける罰が与えられます。(p.315、4行目に続く部分)</p> <p>注：基礎資料として、本稿の「Ⅵ、省略部分の紹介」にカルタ部分の訳を掲げた。</p>	<p>枚にはその諺の挿絵が刷ってある。諺はどれも日本語のいろは五十文字の何か一つで始まり、それが五十音図全部にわたる。子供が輪になって並ぶと、札を切って分ける。一人が読み手に指名される。読み手は札を見ながら諺を読む。その諺に相当する絵をとった者はハイと呼ばわり、その勝負がきまる。自分の持ち札が最初になくなった者が勝つ。最後の札を持っていた者が負ける。もしそれが男の子なら顔に墨で妙なしをつけられ、女の子なら髪に紙が一握りの藁がさされる。(pp.156-157)</p>
---	---

注：Unbeaten Tracks in Japan は、2 巻本として1997年版 Collected Travel Writings of Isabella Bird:12 Volumes Volumes のVol.4、1 巻本はTraveler's Tales (San Francisco) の2000年版を使った。

グリフィスは THE MIKADO'S EMPIRE New York: Harper & Brothers を、邦訳は高梨(2000年)と山下(1984年)を使用。

上の対照表から、次のような共通性が浮かび上がってくる。

- ①・複数のカブトムシが米を積んだ荷車を引く
- ②・凧の材料→竹
 - ・うなり→鯨のヒゲ(訳文では、それぞれ、「鯨骨」、「鯨のひげ」と異なるが、原文では、共に whalebone)
 - ・タコ糸→ガラスの破片をつけて相手の糸を切る
 - ・戦利品→勝者が敗者の凧をもらう
- ③・ゲームのやり方
 - ・ゲームの敗者に対する罰 女の子→藁を髪に挿す、男の子→墨で顔に描く

われわれが彼女の見た碇ヶ関を復原するに際しての問題点となったのは、まさにこれらの共通点であった。殊に津軽凧はその歴史から文献や研究者が多く、弘前や五所川原の凧の会、さらには日本凧の会にも問い合わせたが、彼女がここで描いた凧は、青森県の凧ではない。また聞き取り調査などから当時遊び¹³²に「米」を用いることは考えられないという結論に達した。しかし、一方で、大雨の記述、川、橋、家、人口、産業といった碇ヶ関村に関する記述はかなり正確なのである。平川の洪水で流れてくる材木の状況についての記述などは、記録や村の高齢者の話から確認できた¹³³。また学校に関する情報もまた非常に正確である。当時、県下でそれぞれ異なった日程で試験をしていた中で、碇ヶ関の日程と一致しており驚くほどである。それは、『青森県教育史』、『明治の学校』等にも書かれていない。「細心の注意深さによる正確な記述」と「見なかった子どもの遊び」の対比はどこからくるのであろうか。

バード自身が、「見たままのことをありのままに書いたのであり、そういうことは、私が作りだしたものでなく、わざわざ探しに出かけたのでもない。」¹³⁴と書いているように、出来るだけ見たままを伝えることは彼女の本意であった。しかし「通訳を通じて、地方の住民から直接に、なんでも聞かなければならなかった。」¹³⁵とあるように、事実を知ることは大変なことでもあった。その

通訳を務めた伊藤については、「各地で、警察や駅通係からその土地の戸数や、その町の特殊の商業をたずねて、私のためにノートに記しておく。彼は非常な努力を払って正確に記録しようとする。」「確かでないなら書きこむ必要はありません」¹³⁶といったことが書かれている。また勝海舟の息子梅太郎の妻となったクララは「あのしつこいバード老婦人」「彼女は本を書くつもりで、誰にでもしつこくいろいろ聞きだそうとするので、誰も側へ行きたがらない人物なのだ」¹³⁷と日記に書いた。ここからは実に熱心に日本についてなんでも知ろうとする彼女の好奇心に満ちた姿が浮かぶ。またストッダートの伝記では英国地理学協会の図書館で熱心に調べ物をしている彼女の姿が見られる。彼女はその記述に際し、多くの文献を読破する勉強家でもあり、また彼女が日本で出会った多くの友人達や関係機関¹³⁸から情報を集めていたことは確かである。ここには伊藤を通しての正確な情報と彼女の勉強の結果である「日本の子ども文化」が平行しているのである。このことが津軽という独自の文化背景をもつ碓ヶ関の子ども文化との乖離となった。彼女が描いたのは、われわれが復原を試みた明治11年の碓ヶ関の子どもの姿ではないと結論せざるをえなかった。

VI. 省略部分の紹介

2巻本に記されていた子どもの遊びのカルタとことわざに関する部分のほとんどは、訳本のもとになったabridged editionでは省かれているので、ここにその省略部分を訳して、英文と共に紹介する。

Unbeaten Tracks in Japan (2vol) London: Ganesha Publishing Ltd. & Tokyo: Edition Synapse 1997¹³⁹, pp.366-368 (注: abridged edition (Traveler's Tales 2000) Letter XXVIII. (Continued), p.214-3行目に続く。)

This game of *I-ro-ha garuta*, or Alphabet Cards, is played with small cards, each one containing a proverb. On another is a picture which illustrates it. Each proverb begins with a letter of the Japanese syllabary. The cards are shuffled and dealt, and the children appoint one of their number to be the reader. He reads a proverb on one of his cards, and the one who has the picture corresponding to the proverb read calls out. The one who first gets rid of his cards win the game, and the one who has the last card loses it. The game was played with great animation and rapidity, but with the host amusing courtesy. All the ugly, open-mouthed, kindly lookers-on were delighted. At the end the loser, who was a little girl, had a wisp of straw put into her hair; had it been a boy, he would have had certain prescribed ink marks made upon his face. All this was gone through with stinging wood smoke aggravating the eyes, cooking going on upon the fire, carding cotton on the mats, and from the far back gloom four horses watched the dimly-lighted circle. Then tea was handed round, and I gave sweetmeats to all the children. Then Ito made a rough translation of many of the proverbs, some of which, partly from the odd language into which he put them, and partly from their resemblance to our own, made me laugh uncontrollably, and my mirth, or my unsuccessful efforts to restrain it, proving contagious, it ended in twenty people laughing themselves into a state of exhaustion! I feel much better for it, and thoroughly enjoyed the evening.

Ito has since written what he says is a good translation of the best sayings, or what he thinks the best., which I send. Is it not strange to find the same ideas gathered up into recognisably similar forms in Japan as in England, and cast into these forms at a date when our ancestors were clothed in paint and skins? "Speak of a man and his shadow comes." "A tongue of three inches can kill a man of six feet." "Curse a neighbour and dig two graves." "Never give a ko-bang to a cat." "The fly finds the diseased spot." "A small minded man looks at the sky through a reed." "The putting-off man sharpens his arrows when he sees the lion." "Diseases enter by the mouth." "For a woman to

rule is as for a hen to crow in the morning.” These are a few, with clever though not always refined illustrations, but Ito brought a book of proverbs, of which he translated many, among the best of which are – “Good doctrine needs not help from marvels.” “Love flies with the red petticoat” (only unmarried girls wear this Piquant garment). Among those which indicate the impossible are – “scattering a fog with a fan.” “Building bridges to the clouds.” “To dip up the ocean with a shell.” Among the most curious of the axioms are – “If you hate a man let him live.” This is another of the proofs of the disrelish for life which is so common among Orientals. “Many words, little sense.” “Let the preaching suit the hearer.” “To be over polite is to be rude.” “The doctor can't cure himself.” “Hell's torments are measured by money.” “The fortune-teller can't tell his own fortune.” “There are thorns on all roses.” “Inquire seven times before you believe a report.” “To know the new search the old.” “He is a clever man who can preach a short sermon.” “Don't rub salt on a sore.” “A cur is bold (or barks bravely) before his own gate.” “Treat every old man as thy father.” “When old men grow too old, they must obey their children.” “A good son makes a happy father.” “Famous swords were made of iron scrapings.” “A wise man keeps to his money.” “A man who lends money to a friend will never more see his friend or his money.” “Trust a woman so long as thy mother's eyes are on her.” “Tell not thy secrets to a servant.” “Thine own heart makes the world.”¹ Some of these, you will observe; contain very good teaching, and others are intensely worldly. A number more, showing a distrust and low estimate of women, were translated, but I will only give two – “A wise wife seldom crosses her husband's threshold,” and “A childless wife is a curse from the gods.” One beautiful proverb is, “The poet at home sees the whole world,” and another is, “The throne of the gods is on the brow of a righteous man.”

邦訳（高梨、2000）のp.315、4行目に続く部分。

「いろはガルト」というのはわが国のアルファベットのカードにあたるものですが、一枚一枚に、ひとつのことわざが書かれた小さい札を使って遊びます。もう一組には、そのことわざの絵解きが描かれています。それぞれのことわざは、日本語の字音（いろは47文字）のどれか一文字から始まっています。札はてんをきられ、配られます。子どもたちは自分たちの中からその読み手を指名します。読み手は、手に持った読み札に書かれたことわざを読み上げます。取り手は読み上げられたことわざに一致する絵札を取ります。自分の持ち札が最初に無くなった者が勝ちです。最後の一枚を持っている者が負けということになります。ゲーム（カルタ）はひどく活発でものすごい速さで行われますが、しかし宿の亭主は礼儀正しさを楽しんでいます。見物人はみんな口をあぐりとあけて呆けた顔をして、心から楽しんでいます。おしまいに負けた子どもは、それは小さな女の子だったので、一握りの糞を髪に挿されました。もし男の子だったら、顔に墨で決まった印を付ける罰が与えられます。これらのこと全部はずっと薪を燃やす煙が眼をシクシク刺すように刺激する中で行われていました。火の上は料理中（ナベがかかっており）で、ござの上では綿を梳くいているところでした。ずっと後ろの暗がりからは、四頭の馬がぼんやりと照らされている輪になった一団をじっと見ていました。終わるとお茶が配られたので、私は子どもたちみんなにお菓子をあげました。それから伊藤は、たくさんのことわざを簡単に訳してくれました。それらのうちの幾つかには、ところどころに彼の訳がおかしいところがあり、時には、英語の諺と似ているものがあり、とめどなく私を笑わせ、止めようとしても止めようのないほどでしたので、そこにいた二十人全員がおしまいに笑い転げてくたくたになってしまったほどです。私はそのためにすっかり気分がよくなって、その夕べをすっかり楽しみました。

伊藤は、それ以来、私が手紙に書く中で、最善の諺、あるいは、彼が最善と考える諺の良い翻訳をそれ以来書き続けています。日本においても、英国の我々の祖先がまだ裸でイレズミを入れてい

た頃に定まったのと同じ考えが、明らかに同じと分かる形式にまとまったのを見出すのは、不思議ではないでしょうか。

「うわさをすれば影がさす」「舌三寸の囀りに五尺の身を果たす」「人を呪わば穴二つ」「猫に小判」「臭いものに蠅がたかる」「心の狭い人は蘆の髓から天をのぞく¹⁴⁰」「猪をみて矢矧ぐ」「口は禍の門」「女が支配することは朝の雌鳥がトキをつくる〔雄鶏の真似をする〕ようなものだ」。次の2、3の例は、言っていることは賢いのですがあまり上品な言い回しとはいえませんが、伊藤はことわざの本を持っていてその中からたくさん訳出しています。その内の最もうまく出来ているものには次のようなものがあります。「正法に不思議無し（正法に奇特無し）」「愛は赤いペチコート（腰巻）と共に飛んで行く¹⁴¹」（未婚の女子だけがこの気の利た衣装を着ている）。ことわざの中には不可能なことを指すものもあります。「扇で霧を撒き散らす」「雲に橋を架ける」「貝殻で海を汲み出す」。最も奇妙な格言は、「憎い者は生きてみよ」これは東洋ではとても当たり前なのですが生命を厭うことを立証する別の格言の一つです。

「巧言令色少なし仁（口数多いが意味がない）」「嘘も方便（説教は聞き手にあわせろ）」「慇懃無礼（礼儀正しすぎるのは無礼）」「医者の不養生（紺屋の白袴）」「地獄の沙汰も金次第」「陰陽師の身の上知らず」「バラには棘がある」「七度訊ねて人を疑え」「古き温をねて新しきを知る（温故知新）」「説教は短きを持って良しとする（短い説教をする男は賢い）」「切傷に塩を塗るな¹⁴²」「わが門にて吠えぬ犬無し¹⁴³」「老いたらんは親とせよ」「息子がよければ親は幸福」「名刀も鉄くずから」「賢い男は金を貯める」「友人に金を貸すと友人か金のどちらかを失う」「汝の母の目が彼女に見られる時その女を信頼せよ」「そなたの秘密を召使に洩らすな」「世間は汝の心次第、あなたもお気づきのよう、これらのうちには大変良い教えを含むものもあり、また非常に俗っぽいものもあります。ここに挙げた以上の数の、女性不信と女性蔑視が示されている英訳された諺がありますが、ここではほんの二つだけ挙げておきましょう。「賢い妻はめったに夫の敷居をまたがない」や「子無きは神の思し召し」といったものです。「歌人は居ながらにして名所を知る」や他に「正直の頭に神宿る」という美しいことわざもあります。

原注1：これらのことわざのうちには、言葉がわずかに違うもののグリフィスが書いた『ミカドの時代』のなかに収集され出てくるものと同じものが見受けられます。

訳注：この省略部分の多くはグリフィスの『明治日本体験記』に類似の記述があり、カルタ・諺部分に関しては、山下英一氏の訳を参考にさせていただきました。

これらの諺の多くはバード自身が上の原注1でことわっているように、グリフィスに見られる。下記の文のような一致点も見られるが、同じ諺に対してバードは女性のペチコートのような表現を卑俗と感じているのに対して、グリフィスは、「母親になる苦しみや結婚に気苦労に耐えても、冷淡にしかあしらわれなかった女の悲しい話を物語っている」と述べ、「娘時代の赤い襦袢（腰巻）とともに愛は去っていくという女の悲しい物語だ」と書いている。逆にバードが東洋の生命を忌む理解しがたい生命観を表す諺だと思う「憎い者は生きてみよ」に対しては、グリフィスは何のコメントも与えていない。両者の諺に対するコメントの差はどのように日本を見ているかが現れているように見える。

VII. おわりに

イザベラ・バードの描いた碓ヶ関の子どもたちの遊びの面白さに魅かれて調査を開始したのであるが、結果としてバードが描いた子どもの遊びは「日本の子ども」であり津軽の地域文化の中の子どもの遊びと特定できないという結論に達した。1880年のマレー社からの初版と同年に、ニューヨークのPutnam's sonsからfacsimile版として出された“*Unbeaten Tracks in Japan*”では、第何信と

いう手紙形式ではなく、それぞれの章のテーマが章題としてつけられている。碇ヶ関の部分は、「CHILDREN'S GAMES.」というタイトルで内容は、Scanty Resources-Japanese Children-Children's Games-A sagacious Example-A Kite Competition-Alphabet Cards-Contagious Merriment-Popular Proverbs-Personal Privationsとなっている。このことから彼女には「日本の子ども」を描こうという意図、或は書いた結果が「日本の子ども」であるという認識があったと考えられる。

再び彼女の描いた子どもの遊びに目を向けてみると、幾つかの共通項が見つかる。第一は遊びに米に関するものが出てくることである。カブト虫の引く車は米を積み、水車は脱穀機の模型であり、カルタで負けた子どもは藁を髪に刺される。バードのみならずグリフィスや当時の在留していた外国人にとって、米は日本の食を代表するものであった。凧、竹馬、カルタといった日本の伝統的遊びと米文化の組み合わせは日本そのものであったに違いない。また削除されたカルタ部分での鍋の架かった囲炉裏端、行灯の薄暗い明かり、綿を梳くといった背景も日本を描いた絵のようである。彼女が伝えたかったのは、日本文化だったと考えられる。そしてまたこれらの情報は当時の日本にいた外国人社会が共有していた日本文化理解でもあった。

第二は、これらの遊びに共通して見られる「行儀のよい静かな子どもたち」と「子どもの遊びを見守る大人達の姿」である。silently¹⁴⁴という単語が示す「じっとだまっている子ども」は彼女にとって驚くべきものであり、英国の子どもとの大きな違いでもある。彼女が「私は日本の子どもたちがとても好きだ」¹⁴⁵と述べそれに続けて、①赤ん坊が泣くのを聞いたことがない、②子どもはうるさかったり、言うことをきかなかったりしない、③文句を言わずに従う、④自分達だけで遊ぶように仕込まれている。⑤年長者に従う、⑥転げまわったり、叫んだり、喧嘩したりしない、などがあげられている。このような子どもの姿を「遊んでいる子ども」と「それを見物している子ども」とで表現してみたのではないだろうか。バードは碇ヶ関に場を借りて彼女の日本の子ども観を展開した。しかし手放しで日本の子どもを良いと言っているわけではない。彼女は「子ども達は実におとなしい。しかし堅苦し過ぎており、少しませている。」と続ける。日本の子どもの問題点も見ているのである。それは現在でも日本の子どもたちにとっての問題でもある。バードが故国に伝えたかったもの、それは日本そのものだった。彼女の生き生きとした筆は日本の風景や子どもの姿を描き出す。それが必ずしも見たままでなかったとしても彼女の眼に映った日本であり、バードの東北であった。それは異文化の眼差しから見えた日本の農村の姿であり、我々が気づかなかった子どもの姿である。「生きている実態としての子ども」という形に残りにくいものを見るという視点である。こうしたことを踏まえて、イザベラ・バードの再発見を今後の研究課題としたい。

謝辞：

今回の調査にあたり、碇ヶ関村教育委員会の工藤真也さん羽賀良子さんをはじめ、聞き取り調査に協力して下さった斎藤祐一、木村萬次郎、山田久次郎、白戸あねの皆様にはこの場を借りて感謝の意を表します。更に、バードに食事を持っていったという葛原きんの孫娘鳴海麗子さん。葛原マサさんをはじめとする葛原家ゆかりの方々、工藤ケンコウ商店の工藤キヨさん、北海道（瀬棚）に在住の宮本文子さん、碇ヶ関の古い話を教えて下さった新しやの工藤堅一さんなど碇ヶ関の皆様には親切な対応で教えられることが多くお礼申し上げます。凧の資料を送って下さった日本凧の会、田原凧の会、津軽凧の中野啓造氏、忙しい中、対応して下さった下川原焼きの高谷信夫さん、青森測候所の三上康治さんに深くお礼申し上げます。最後になりましたが青森県の教育史について御教示戴きいただきました牧野吉五郎先生に感謝申し上げます。

〔脚注〕

- 1 高梨健吉訳、平凡社、東洋文庫1973。原著の初版（1880）は2巻本であるが、これは1885年に出た1巻本（短縮版）の訳本である。
なお本稿中の引用は、東洋文庫版に比して、かなりの改訳がみられるので平凡社ライブラリー、2000年版を用いた。以下、引用文の日本語ページのみを表記は平凡社（2000）版。略記はバードとする。
英文のページ表記のみは“Unbeaten Tracks in Japan” Ganesha Publishing Ltd. & Tokyo: Edition Synapse（1997）版を表し、略記はBirdとする。
- 2 現青森県南津軽郡碓ヶ関村。江戸時代には碓ヶ関町であった。「従碓関町釈迦内村などの記述がある」青森県史 近現代（以下県史）2002、p.716。
- 3 平凡社 1965、第1巻、p.167「天明5年（1785）8月21日、碓ヶ関にきた」。
- 4 『東遊雑記』平凡社、1964、p.97「天明8年（1788）7月14日巡検使に随行して矢立峠を越え碓ヶ関止宿」
- 5 佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記』第1巻、大空社、1998、p.40「共和2年（1802）8月7日矢立峠を越え碓ヶ関に入り、翌8日雨の中を出立」
- 6 “Six Month among the Palm Groves, Coral Reefs, and Volcanoes of the Sandwich Islands” John Murry 1875, “A Lady's Life in the Rocky Mountains” John Murry 1879, “Unbeaten Tracks in Japan” John Murry 1880, “The Golden Chersonese and the Way Thither” John Murry 1883, “Journeys in Persia and Kurdistan” John Murry 1891, ‘Among the Tibetans’, “The Leisure Hour” 1893, “Korea and her Neighbours” John Murry 1898, “The Yangtze Valley and Beyond” John Murry 1899.
- 7 Stoddart, Anna. M., “The Life Of Isabella Bird (Mrs. Bishop)” John Murray 1908.
- 8 Barr, Pat, “A Curious Life For A Lady The Story of Isabella Bird” Macmillan John Murray, 1970.
- 9 チェックランド, O (Checkland, Olive)、川勝貴美訳『イザベラ・バードの旅の生涯』日本経済評論社 1995。
- 10 金坂清則「J. ビショップ夫人の揚子江流域紀行」大阪大学教養部研究集録、42：63-129、1994。
「イザベラ・バード論のための関係資料と基礎検討」旅の文化研究所研究報告、3：1-76、1995。
金坂氏は資料を時間軸で6期に分類すると同時に、(A) 著書・論文などの著作、(B) 自筆原稿などの手書き資料、(C) 写真等の非文字資料、(D) 講演・学会等の活動・行動資料、(E) 第三者の手によるものに分類。「イトー、すなわち伊藤鶴吉に関する資料と知見－イザベラ・バード論の一部として－」、地域と環境（京都大学大学院人間・環境学研究科編）No.3：21-66、2000。
- 11 武藤信義「書評と紹介 イザベラ・L・バード著・高梨健吉訳『日本奥地紀行』（東洋文庫240）平凡社」栃木史心会報、7,14,18,19,20号、1983、1986-89。
- 12 長谷川誠一「二つの英国人蝦夷旅行日記 Thomas W. Blakiston Isabella L. Bird」酪農学園紀要、第10巻、1984、p.46。
- 13 楠家重敏『日本アジア協会の研究』日本図書刊行会、1997、『バード日本紀行』雄松堂出版、2002。
- 14 初版本（2巻本）の副題は、‘An account of travels in the interior, including visits to the aborigines of Yezo and the shrines of Nikko and Ise’ となっている。1巻本の出版（John Murray, 1885）に際して、伊勢神宮訪問の部分の削除に伴い、副題からも and Ise の部分が削除された。
- 15 Capron, Horace、西島昭訳『ケブロン日誌・蝦夷と江戸』北海道新聞社、1985、p.353。
- 16 楠家2002、pp.358-359。グリフィス、マクラティ等の論文の活用については、楠家氏が論じており、蝦夷部分に関しては、金坂、長谷川等が論じている。
- 17 ブラキストン (Blakiston) T・W、高倉新一郎校訂、近藤唯一訳『蝦夷地の中の日本』八木書店 1979。pp.344, 349。
- 18 Griffis, William Elliot “The Mikado's Empire” Harper & Brothers 1876、山下英一訳『明治日本体験記』は『皇国』(The Mikado's Empire) の第2部 ‘Personal Experience, Observations, and Studies in Japan’ の全訳。
- 19 井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』講談社、1998、pp.64, 66。
4つの定義 (1) 白人の同伴者のいない女性のひとり旅（現地通訳、ガイド、荷役を連れている）、(2) 多くの場合30代から40代の独身女性、(3) 旅の費用は自己負担、(4) ヨーロッパ以外、おおむね当時「野蛮」といわれていた地域への旅であること、「白人女性として、初めて」の地を目的地とする。
- 20 金坂、楠家がこの点を論じている。
- 21 王立地理学協会 (Royal Geographical Society) の評議会でジョン・マレーに推薦されたビショップ夫人（イザベラ・バード）が特別会員となったいきさつは、アンナ・ストグダート、O・チェックランドの伝記に詳しく述べられている。また地理学協会や旅のルートなどの地理学的調査は金坂氏の研究が詳しい。
- 22 チェックランド、1995、p.40、原題は “Isabella Bird and a Woman's Right to do what she can do well.” (1995) で女性の権利に焦点をあてている。しかしチェックランドはバードが貧しい女性や子どもの姿に言及してもそれ以上の調査をしなかったことから彼女は社会改革者ではなかったと書いている。
- 23 加納孝代「イザベラ・バード『日本奥地紀行』」『国文学 解釈と観賞』1995、第60巻、3号、1995、p.114。
- 24 イアン・ニッシュ編・日英文化交流研究会『英国と日本』博文館新社、2002、p.130。

- 25 Mrs. Bishop (Isabella L. Bird) : “Korea and her Neighbours” Popular edition (1 巻本), John Murray 1905. 時岡敬子訳『朝鮮紀行』講談社学術文庫、1998。
前掲書の初版本は同名で1898年にJohn Murray 社から2 巻本として出版された。邦訳は朴尚得『朝鮮輿地紀行』全2 巻、平凡社、1994がある。
- 26 楠家、2002、p.373「バードの著作では女と子どもに関する描写に半分以上が割かれている」。
- 27 『朝鮮紀行』 にソウルの元日の風俗として「それまでの二週間ソウルの街を活気づけていた凧上げと石合戦もこの日、正月一五日「元旦」で終りになる」という記述がみられるくらいである。
- 28 Charles Darwin (1809-1882) イギリスの生物学者。進化論の提唱者。生物学・社会科学及び一般思想界にも画期的な影響を与えた。著書『種の起源』『家畜及び栽培植物の変異』『人類の由来』『人類及び動物の表情』『ビーグル号航海記』など。
- 29 Stoddart、p.98、このとき、いっしょにいたゴードン・カミングもバードに遅れること数ヶ月(1878年9月)で日本にやって来た。カミングもまたレディ・トラペラーのひとりである。バードのために、ハリー・パークス卿夫妻への紹介状を書いたのはレディ・ミドルトンに紹介されたアーガイル公爵である。カミングはそのアーガイル公爵の親戚の令嬢である。またカミングとバードは1870年に出会いその後友情を暖めあったとある。
- 30 伊藤鶴吉(1858-1913) 横浜日本通訳協会の会長を務めた。神奈川県出身。
- 31 Bird、p.231、この部分は1 巻本では省略されている。そのため1 巻本では、最初から羽州街道を北上する旅程を組んでいたように見える。省略部分には「陸路の旅は約450マイルあり、自分が行こうと思う路についてはなにもわからない。伊藤が宿屋で仕入れてくる情報は、道が通れない、通行が難しい、まともな宿泊施設がない」といったことが書かれている。
- 32 この表題は、前掲書p.83に掲載のまま。正しくは、“Notes of a Journey from Awomori to Niigata, and of a Visit to the mines of Sado”。
- 33 The Asiatic Society of Japan 1875, pp.83-100.
- 34 明治十一年八月三日、公文録：国立公文書館蔵、(青森県史 地学2001より転載)、同年7月31日付北斗新聞もこの直前の7月22～23日の平川の洪水を記事にしている。
- 35 仮子(借子)：津軽地方では、「カレッコ、カレゴ」と呼ばれ、農家に住み込み仕事を手伝う主に男子のこと、女兒はアダコ(子守)という。仮子証文：黒石市史(1988)、平賀町史(1985)に証文が載っている。
- 36 葛原きん慶応2年生まれ(葛原家由緒記録)
- 37 葛原大介の長女さんの孫娘鳴海麗子、大正2年生まれ、娘の羽賀良子さんが立ち会って、葛原旅館の聞き取り調査に協力してくれた。きんには、兄大助(由緒記録では乙助)がいた。亭主の大助は早世したとのこと。
- 38 正式には副戸長、明治11年9月に戸長となる。現在も同じ住所に伊惣助から5代目にあたるマサさんと家族が住んでいる。屋敷はバードの来た後、明治天皇宿泊のため和洋折衷の洋館に建て替えられたが、翌年の大火で焼失、天皇は宿泊せずお休みになったという。庭に碑が立っている。『碓ヶ関村学制施行百年誌』(1974)に掲載されている唯称院に残る過去帖には、明治7年碓ヶ関小学校設立時の黒石の戸長は工藤儀朗、副戸長は葛原伊惣助であったことが記されている。明治11年9月に伊惣助は戸長に任命された。
- 39 これらは、いずれも葛原家に残る『由緒記録』。伊惣助の役職詳細は、齋藤・高畑(2005)、前掲、p.55。
- 40 明治19年には小林区署(営林署)が設置。しばしば杉の盗伐により罰せられた記録が残っている。『津軽史』十巻、青森県文化財保護協会、1982。
- 41 青森県文化財保護委員会、1964、第2巻、p.209。
- 42 現在も同所(碓ヶ関56-1)で営業。現店主は5代目の北川昭。
- 43 碓ヶ関3番地、2002年まで営業していた。
- 44 現在瀬棚町に住む宮本文子(昭和9年生まれ)、現当主工藤ミツ(明治44生まれ)の娘(兼弘の曾孫)の話し。
- 45 “したかわらやき”創業文化初年、文化7年(1810年)現在地、青森県弘前市桔梗野(下川原)に陶工を設置する。津軽藩公9代寧親公に召され、当地で製陶に従事する。現在は郷土玩具「はと笛」で有名。
- 46 津軽地域ではこぎうち、こげうち、青森地域ではコッパうち、黒石地域では、くいうち、関東地方-根木(ねつき)、常陸地方-根杭打ち(ねつくいうち)。
- 47 県史、p.117。
- 48 内藤官八郎著『弘藩明治一統誌 工商雑録』1892(青森県立図書館蔵)。
- 49 明治45生まれ。
- 50 本論文：衛生状態を参照、シタゴ歌を記載。
- 51 蕎麦粉と砂糖でつくる硬い菓子。
- 52 『青森縣治一覽表 明治11年』青森県立図書館蔵、以下『縣治一覽表』。
- 53 バード、p.331(第32信)、同様の記述はガビンスの青森から新潟までの旅行記にも出てくる。ガビンスは青森の有名なもの“メイブツ”として‘a kind of sweetmeat made of beans and sugar’(豆と砂糖で作られた菓子)を挙げている。“The Asiatic Society of Japan” vol.3、1875、p.83。
- 54 この校舎は、バードの来た明治11年に落成し、翌明治12年3月13日の大火で焼失した。

- 55 村内の古懸小學校も明治11年発足とされているが明治11年の県の記録には残っていない。古懸小學校の明治12年は男教員1、男子生徒14人。
- 56 明治11年10月30日、郡制が制定。
- 57 前野喜代治『青森県教育史續』青森県文化財保護協会、1961。
- 58 牧野吉三郎『青森県教育史』第1巻「青森県近代教育の発足」、青森県教育委員会、1972、p.509。
『日本近代教育史研究序説』津軽書房、1987。
- 59 『学校諸規則』弘前市立図書館蔵。
- 60 1877年（明治10年）2月発効。
- 61 『青森県教育史』第一巻 記述篇1、青森県教育委員会、1972、p.610。
- 62 前掲書、p.564。
- 63 前掲書、p.610。
- 64 前野喜代治、p.82。
- 65 Bird、p.357。
- 66 「九月十四日の朝」、『正岡子規全集12巻』講談社1975、p.570（注、本の復習となっている）
- 67 『日本奥地紀行』の中でいよいよ奥地への旅へ踏み出すのは、LETTER IX（邦訳：第六信柏壁）からである。柏壁（埼玉県、春日部）：日光街道の四次（第四宿）は日本橋を早朝で一泊目となる宿である。「私は長い旅行を始めた。しかしまだ「未踏の大地」には至っていない。」（p.67）
- 68 バード、pp.121, 130、Bird、p.139。
- 69 森有礼、田中不二麿等の明治初期の日本の学校制度を創った指導者がアメリカのニューイングランド、ボストンの公立小學校を範としたこと、福沢諭吉等の西洋事情を日本に紹介した洋学者たちがとりわけアメリカの書物をきそって訳出したことなどによる。倉沢剛『小學校の歴史I』ジャパンライブラリービューロー株式会社、1963、pp.657-658。
- 70 ベスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）（1746-1827）スイスの教育家ルソー・カントの影響を受け、孤児教育・小學校教育に一生を捧げた。
アメリカでは、「1960年の後半、南北戦争が収まる頃から、ベスタロッチの直観教授の思想がアメリカにおしよせ、ニューイングランド地方の師範學校、なかでもオスウィーゴ・オーバニー・ボストン・フィラデルフィヤ・ニュージャージーなどの師範學校を中心として、ベスタロッチの教育思想を取り入れ「事物教育」（Object lessons）の方法を活発に進めていた。」倉沢剛『小學校の歴史』I、1963、p.659。
- 71 倉沢剛『小學校の歴史』I、1963、pp.917, 919「ベスタロッチは子供たちに進んで考えるように導こうとしたのに対して、日本の教育はベスタロッチ法の精神を不消化のまま、ただその外観をまねしたことになった」と倉沢は述べている。
- 72 『青森県教育史』第三巻、1970、pp.119-120。
- 73 前掲書、pp.166-169。
- 74 前掲書、p.169。
- 75 明治10年3月創刊、明治11年8月百号を出して終わった。縣治一覽表では明治11年11月廃業となっている。
- 76 『青森県日記百年史』東奥日報社1978、各校の第1級から優秀なるもの1名の代表（合計120名）が競った試験であった。
- 77 学田掛（学田係）：葛原家の由緒記録によると伊惣助は明治11年3月と8月に学田係に任命されている。
明治10年9月に「学資の調達のために、学田興設をすることになった。」という県布達が出された。またこの布達では、特に5分の1にすぎない学齡期女子の就学率の改善が取り上げられた。これを受けて、翌明治11年には、学田著手法、同年11月5日には学田管理法（甲第百二十拾三号）があいついで出された。『青森県教育史』第三巻（1970）pp.179-180, 203-206。
- 78 教育に関して彼女が話しあったと推察できる人物がもう一人いる。北川源八（1848-1889）の名はアーネスト・サトウ（Satow, Ernest Mason）の『明治日本旅行案内』（平凡社1996）に碓ヶ関の宿として葛原大介と共に記されている。サトウの情報源はバード女史と断りがあり、彼女が会った可能性が強い。源八は碓ヶ関小學校創立当時の管理者（第2代は葛原伊惣助）として『碓ヶ関村学制施行百年誌』（1974）に挙げられている。共に当時の碓ヶ関村の実力者であり、教育への造詣が深かった。当時、葛原伊惣助宅の向かいに大きな屋敷を構えていた。北川源八の兄弟（6人中3人）は明治の中頃アメリカに渡り仕事をした。帰国後それぞれ、旅館（アメリカ屋）、村長（碓ヶ関村）などの仕事をした（アメリカから帰国後村長をした五男の常吉の孫に当たる鈴木茂子と北川（直行）家、アメリカ屋の調査協力による）。
- 79 三戸小學校百年史編纂委員会『三戸小學校沿革史』青森県三戸町立三戸小學校内三戸小學校創立百周年記念事業協賛会、1974、pp.3-4。
- 80 『青森県歴史』第四巻 青森県文化財保護委員会、1969、p.427。
- 81 『青森県教育史』第三巻、1970、p.182。
- 82 『青森県教育史』第三巻、1970、p.201。
- 83 明治11年11月廃業の北斗新聞の後を受けて明治12年3月に創刊された新聞。

- 84 北彰介『オモチャッコ』青森県児童文学研究会、1972、p.282、碇ヶ関で「シタゴ」と呼ばれる四角い紙風船と同じもので、青森では「トビマル」と呼ばれた。
- 85 バード、p.313。
- 86 山下英一によると1874年3月28日の日本アジア協会の席上で発表されたとする。山下訳『明治日本体験記』平凡社、1984、p.152。
- 87 Ayrton Matilda A. (旧姓 Chaplin) - 工部大学校 (東大工学部の前身) で物理学、電気工学を教えた英国の物理学者、電気技師、発明家であるエアトン (Ayrton, William Edward) の夫人、女医の開拓者で日本に産婆学校を開設 (1873)、著書 Child-life in Japanese Child Story (1879)。
- 88 楠家、1997、pp.109-111。
- 89 バード、p.143。
- 90 バード、pp.313-315。
- 91 バードは、「子どもたちは竹馬に乗りながらも風をあげた。…それから大勢の子どもたちは竹馬の競争をやった。」(バード、p.314) と竹馬で遊ぶ様子を述べている。竹馬も津軽地方で見られる子どもの遊びのひとつであるが、本論分では風の問題を集中するために、取り上げて論じることは割愛した。
- 92 縮刷版では、カルタの部分はほとんどが削除されている。本論文「省略部分の紹介」を参考。
- 93 遊びと店で買ったものに関する聞き取りは、明治生まれの高齢者のみとした。
- 94 碇ヶ関はバードが逗留した翌年 (明治12年) にわずか3軒を残すのみという大火に見舞われている。また明治38年にも283戸中227戸を焼失する大火があり、いずれも小学校や寺が類焼している。そのため文献の時期は江戸時代から昭和の初めまでの津軽という広い範囲に頼らざるを得なかったので、明治11年・碇ヶ関という時間軸・地点上の正確さを欠くことになるかもしれないが、江戸から明治・大正・昭和へと続いた津軽の子どもの遊びの一片は垣間見ることはできるだろう。
- 95 『青森県警察史』青森県警察本部、1973。
- 96 内藤官八郎『弘藩明治一統誌 工商雑録』1892。
- 97 バード、p.313。
- 98 北彰介、青森県児童文学研究会、1972。
- 99 内田邦彦、歴史図書社、1979、津軽に伝わる伝承を集めた (初版は1929年。)
- 100 岩木町、三上貞勝氏が今も作っている。
- 101 バード、p.313。
- 102 'the boys, who devise many ingenious models and mechanical toys, which are put in motion by water wheels.' (Bird, p.129)
- 103 浪岡城主北島氏後裔の山崎氏の家記。みちのく叢書、第1巻、図書刊行会 1983、p.240。
- 104 『山一金木屋又三郎日記』、編者：斉藤昭一、1995、pp.141-142。
- 105 北、p.105。
- 106 Bird、p.85、10-28、バード、p.74の一行目に続く省略部分の一部を訳して紹介した。なお、武藤信義は栃木県部分の翻訳を『栃木史心会報』(1983)に掲載しているので参考にした。
- 107 バード、p.151の3行目に続く部分。
- 108 平岡昭利編『水車と風土』古今書院、2001、pp.22-23, 73, 145。
- 109 青森県での学齢期男子就学率は44.4% (本稿、明治11年の学校事情)、全国の学齢期男子就学率は57.6%であり、学齢期の子どもたちのほぼ半数は就労していた。
- 110 sttodart、p.10。
- 111 中野風3代目の中野啓造氏の話等。
- 112 斎藤正『津軽の風と風絵師の系譜』青森県児童文学研究会、1971。
- 113 前掲書、p.32。
- 114 安政7年 (1860) 旧暦の6月に黒石金正が岩木の金木屋にアメリカビイドロ2枚を進じられた話があり障子に付けたとある。『山一金木屋又三郎日記』p.415。
- 115 1700年には、江戸から伝わった雁木と呼ばれる刃物を付けて切る方法であったが、慶応末期、藩士村上定平が長崎で見つけた硝子を貼り付ける方法がとられるようになり現在まで続いている。天明3年 (1783) には田原藩主三宅家の日記には「年々風が大きく派手になってきたため、たびたび禁令が出た」と記してある。(田原風保存会への電話による聞き取り調査、及び文書による回答)
- 116 淡島寒月 (1859-1926) 明治大正を通じての趣味家、江戸研究者として知られる。
- 117 大正7年 (1918) 1月「趣味之友」第二十五号に掲載された。
- 118 淡島寒月『梵雲庵雑話』平凡社、1999、p.167。
- 119 本稿V子どもの遊びに関するバードとグリフィスの類似性と違い。
- 120 グリフィスが雇われていた福井県福井市にも、風揚げはあったが、このような風揚げはなかった。
- 121 斎藤良輔の『おもちゃの話』の年表には、1864~65に「長崎のハタ (風) 合戦熱狂」(p.2) とある。
- 122 R・ヴェルナー、金森誠也、安藤勉訳『エルベ号艦長幕末期』新人物往来社、1990、pp.162-163。

- 123 Edward Warren Clark (1849-1873) 飯田宏訳『日本滞在記』講談社、1967。静岡学問所のお雇い外人。明治6年12月23日から堂12年12月31日まで開成学校の化学の御雇教師を務めた。
- 124 E・Wクラーク、前掲書、pp.145-146。
- 125 前掲書、p.146。
- 126 斎藤良輔『おもちゃの話』朝日新聞、1971、pp.17-18。
- 127 カルタに関する省略部分の訳文を参照。
- 128 前掲書、p.312。いろはがるたが掲載されている。
- 129 バード、p.311。また彼女自身『『日本アジア協会誌』が私（バード）のために非常に役立った。』（バード、p.19）と述べている。
- 130 本稿Ⅵ省略部分の紹介の最後でもグリフィスに言及している。
- 131 山下英一訳、平凡社、東洋文庫、1984。
- 132 祭・行事に関わる遊びを除外する。
- 133 碓ヶ関村の店屋（新しや）の工藤堅一さんは、大正・昭和になってからの話として、平川の洪水の話をしてくれたが、木や木材が流れ橋に激突する様子は、バードの描写そのままであった。
- 134 バード、p.19。
- 135 前掲書、p.18。
- 136 前掲書、p.262。
- 137 クララ・ホイットニー (Clara Whitney)、一又民子訳『クララの明治日記』(下) 講談社、1976、p.30。クララのバードに対するこのような評価とは異なり、マラヤではバードの滞在していたヒュー・ロウは「あなたの存在が全く気にならなくなっていました。あなたは話すべきときを心得ています。」(O.チェックランド、p.114)と云っている。またクララの日記については楠家氏も女性が女性を見る目は厳しいとコメントしている。(楠家、p.340)。
- 138 バード、p.513。E・Vディキンズ『パークス伝』平凡社、1984、p.288。「外国貿易に関する覚え書きの草案、外国人居留民の統計表などを送ったこと、バードの文章力を高く評価すると共に、パークスの送る数値が正確であることなどが書かれている。」
- 139 日本シノップス (1997) から刊行されたイザベラ・バード全集の第4、5巻として集録された初版の復刻版。
- 140 心の狭い人という説明が諺の一部として付け加えられている。グリフィス、p.209。
- 141 この諺は、Griffis、p.507では、Love leaves with the red petticoat!, flies→leavesと異なる。
- 142 諺では「切傷に塩」で反対の意味。グリフィスはTo rub salt on a sore.、p.511。
- 143 始末におえない相手なら家に駆け込めるようにという説明をグリフィスはつけている。
- 144 Bird、p.314。
- 145 バード、p.312。